「地域コミュニティとマスジドの将来像」
第6回全国マスジド（モスク）代表者会議の記録
2014年2月9日

December, 2015

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

早稲田大学多民族・多世代社会研究所
Institute for Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

早稲田大学イスラーム地域研究機構
Organization for Islamic Area Studies, Waseda University
目次

序.................................................................................................................................3
編者.................................................................................................................................4
会議運営者 .....................................................................................................................4
関連研究助成プロジェクト一覧 .....................................................................................4
プログラム .....................................................................................................................5
開会挨拶と基調講演 .......................................................................................................7
パネルディスカッション .................................................................................................19
序

本報告書は、2014年2月9日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された第6回全国マスジド（モスク）代表者会議「地域コミュニティとマスジドの将来像」の会議録である。本会議は、2009年に「全国モスク代表者会議」として始まり、2012年に名称を「全国マスジド（モスク）代表者会議」と変更して、継続して開催している。第6回会議は、前日の大雪のため欠席者も少なくなかったものの、主催者側を含め約70名近くの参加者があり、ほぼ例年通りの規模で開催され、充実した報告と活発な議論が行われた。

今回の会議は、日本におけるムスリム・コミュニティの将来を考えるという形で展開された。滞日ムスリム・コミュニティは、1990年代初期のニューカマーによるモスク建設の開始の頃から、急速にその存在感を増しており、現在は、滞日ムスリム人口約11万人、国内モスク数80カ所以上を擁する規模にまで発展してきた。これからは、コミュニティの継承とそれを担う世代の交代や次世代育成が大きな課題と考えられる。本会議録がそのような諸課題の達成に寄与することができれば幸いである。

毎年のことではあるが、会議開催にあたっては、各地域のモスク代表者の方々をはじめ、滞日ムスリムの方々、また一般参加の方々など多くの人たちから多大なご協力をいただき、皆様に厚く御礼申し上げ、これからのご協力についても改めてお願いする次第である。

2015年12月

岡井 宏文
店田 廣文
小島 宏
編者
（所属は 2014 年 3 月現在）
岡井 宏文 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手
店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授
小島 宏 早稲田大学社会科学総合学術院・教授

会議運営者
（所属は 2014 年 3 月現在）
小島 宏 早稲田大学社会科学総合学術院・教授
店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授
野田 仁 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員
吉村 武典 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員
砂井 紫里 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手
岡井 宏文 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手

関連研究助成プロジェクト一覧
本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。
・ 平成23〜25年度科学研究費補助金基盤研究（B）・課題番号23330170「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生：ライフスタイル変容の比較研究」 研究代表者：小島 宏
・「人間文化研究機構（NIHU）プログラム イスラーム地域研究」（早稲田大学拠点）研究代表者：桜井 啓子
・ 平成24〜26年度科学研究費補助金基盤研究（C）・課題番号24530669「滞日ムスリムに関する住民意識の3地域比較調査研究と多文化政策再考」研究代表者：店田 廣文
プログラム

第6回マスジド（モスク）代表者会議「地域コミュニティとマスジドの将来像」
日時：2014年2月9日（日）13:30〜17:10
於：早稲田大学・早稲田キャンパス（地下鉄東西線より徒歩5分）
18号館国際会議場（中央図書館と同じ棟3階）第3会議室
早稲田キャンパス内地図：http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda.html
主催：
早稲田大学アジア・ムスリム研究所
早稲田大学多民族・多世代社会研究所
「人間文化研究機構（N I H U）プログラム イスラーム地域研究」早稲田大学拠点
早稲田大学イスラーム地域研究機構

プログラム
総合司会：早稲田大学アジア・ムスリム研究所長 小島宏

13:30〜13:40 開会の挨拶 早稲田大学多民族・多世代社会研究所長 店田 廣文
報告
13:45〜14:15 「大塚マスジドからの報告」
クレイシ・ハールーン氏（日本イスラーム文化センター 事務局長）
アキール・シディキ氏（日本イスラーム文化センター 会長）

14:15〜14:45 「熊本マスジドからの報告」 小嶋雅宏氏（熊本ムスリム協会 理事／広報・ダアワ部門委員）

14:45〜15:15 休憩と礼拝（14:54 サラート（ASR））

15:15〜16:15 パネル・ディスカッション
司会：店田 廣文
パネリスト：前野 直樹氏（行徳マスジド）
アキール・シディキ氏（大塚マスジド）
クレイシ・ハールーン氏（大塚マスジド）
古城 良氏（福岡マスジド）
中村 洋幸氏（福岡マスジド）
エミル・オムルザク氏（熊本マスジド）
小嶋雅宏氏（熊本マスジド）

16:15〜17:00 総合討論

17:00〜17:10 閉会の挨拶 早稲田大学アジア・ムスリム研究所長 小島宏

参考：MAGHRIB 17:17 ISHA 18:38
礼拝室：18号館4階共同研究室1・2（男女別）
Institute for Asian Muslim Studies will hold the Sixth Meeting of Representatives of Masjids in Japan "Local Community and Masjids' Future" (tentative) on 9th February (Sun.) 2014 at Waseda University.

Date February 9th (Sun.) 2014, 13:30-17:10
Venue Waseda University, Waseda Campus, No. 3 Conference Room, Bldg. 18
(Complex of Central Library and International Conference Center)
Map [http://www.waseda.jp/eng/campus/map.html](http://www.waseda.jp/eng/campus/map.html)

Organizer Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University
Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University
NIHU Program Islamic Area Studies, IAS Central Office at Waseda University
Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

Tentative Program: General Chair: Hiroshi Kojima, WU Institute for Asian Muslim Studies
13:30-13:40 Opening Remarks
Hirofumi Tanada, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies
13:45-14:15 Presentation by Otsuka Masjid (Mr. Qureshi Haroon and Mr. Aquil Ahmed Siddiqui)
14:15-14:45 Presentation by Kumamoto Masjid (Mr. Masahiro Kojima)
14:45-15:15 Break/Salat (ASR 14:54)
15:15-16:15 Panel Discussion
Chair: Hirofumi Tanada
Panelists: Representatives of Masjids in Japan

- Mr. Naoki Maeno (Gyotoku Masjid)
- Mr. Aquil Ahmed Siddiqui (Otsuka Masjid)
- Mr. Qureshi Haroon (Otsuka Masjid)
- Mr. Makoto Kojo (Fukuoka Masjid)
- Mr. Hiroyuki Nakamura (Fukuoka Masjid)
- Dr. Emil Omurzak (Kumamoto Masjid)
- Mr. Masahiro Kojima (Kumamoto Masjid)
16:15-17:00 General Discussion
17:00-17:10 Closing Remarks
Hiroshi Kojima, WU Institute for Asian Muslim Studies

Notes: MAGHRIB 17:17 ISHA 18:38
ROOM for Salat: Meeting Room No. 1 and No. 2, 4F of Bldg. 18 (separated for each gender)
議事録の作成にあたり、発言内容を損なわない範囲で、語句の追加や修正、余分な語句の削除や説明の追加などを行った。聞き取りの困難なところについては、一部削除したところもある。なお、編者が説明として追加した部分は、( )で明示した。

開会挨拶と基調講演

＜小島＞早稲田大学のアジア・ムスリム研究所長の小島と申します。一応総合司会ということです。実際のパネルディスカッションの司会はこちらの店田先生にお願いするのですか、もともとこのマスジド代表者会議を始められた店田先生に開会の辞をお願いしたいと思います。

＜店田＞ただいまご紹介いただきました早稲田大学の店田と申します。開会の挨拶ということでお話ししながら、少しお話をさせていただきます。今日の第 6 回マスジド代表者会議のテーマは、「地域コミュニティとマスジドの将来像」と題しております。そのような形で開催させていただきますけれども、マスジドが新たな形でできあがったのが 1990 年代の初めでした。それから 20 年以上が経過いたしました。この 20 年という流れの中でマスジドの人も、あるいはマスジドそのものも、いろいろ変化してきたと思いますが、どのような変化があったのかということについて、いろいろ今日は考えていきたいと思います。その上で、将来像ということについてもいろいろ議論ができますと考えています。

まずいくつかの変化ということで私たちが注目しているのは、一つは非ムスリム社会にある日本という場においてムスリムの方たちが非ムスリム社会と接触することが増加したということが、一つの大きな変化だろうと思います。マスジドは社会から孤立して存在しているわけではありません。いくつかのマスジドは地域社会との間にいろんな関わりを持とうと努力していること、そういった事柄について私たち自身もいろいろ見聞きしております。一方で、働きかけられた我々非ムスリムの方はどのようなことを思い、あるいはどのようにそれに対応しているのか、そういうことについてもお話しできればと考えています。言葉や文化の違い、あるいは個人同士の関わりがなくとも、相互にいっている形で接触が生じているわけですが、そのような中でなされてきたいろんな努力、ムスリムの側、あるいは非ムスリムの側の努力、こういったことについてもこの 20 年の中で生じた変化について考えてみたいと思います。

それが一番目のこところですが、二番目は 20 年という時間の経過がもたらしたもう一つの大きな変化は、今後恐らく一生日本で暮らしていくようなムスリムの方が増えていく、あるいはそのように考えているムスリムの方が増えていくだろうと考えています。食の問題であるとか、あるいは埋葬の問題であるとか、あるいは教育の問題、生活上のいろんな困難はこれまでこの会議の中でも議論されてきました。しかし、本当にもっと真剣にこういった
た課題を議論する必要があるのは、まさにこれからであろうと思います。かつては日本以外で、日本で少年時代を過ごしても将来は母国、あるいは他の国へ行ってしまうと考えていた人もいるかもしれません。そういうオプションを持っていた方、あるいはそういう能力のある方もいたかと思います。しかし、日本に住んでいるムスリムの数が10万人を超えて、いろんな方がいらっしゃいます。いろんな能力、あるいはオプションをもっている方ばかりではありません。そうした中で、日本における生活上の困難、バリアというものを考えた場合、重要なもののは食の問題であるとか、埋葬、教育の問題、それぞれが決してムスリム・コミュニティの内部だけで解決できない問題になって来てつつあるということです。

日本社会との接触の中で考えていかなければならないことが多くなってきたと思います。 Mushroomに限らずどのような人であれ、一人で生きていくことはできませんし、他の外の社会との関わりなしで成長していくことはできません。とりわけ教育の問題については、今後ムスリムの第二世代あるいは第三世代の成長とともに、教育だけではなく就職であるとか就労といった問題についても考えてゆく必要が出てきます。今回の会議では将来を見据えるということで、教育とその先にある社会人の歩みについても議論できればと考えております。いずれにしても、今後多くのトライ・アンド・エラーが行われていくことになると思いますけれども、日本で生きていくと考えている、あるいは将来に日本でずっと暮らしていくことになるムスリムの方たちの増加ということをきっかけにして、教育と就労あるいは就職について議論をしてみたいと思っております。

それから三番目、最後に考えてみたいのは、教育・就労は今申しましたように第二世代、第三世代の問題ですが、それをもう少し別の視点から見ると、ムスリム・コミュニティというものをいかに次世代に引き継いでいくかという、今現在活躍されている人たちから次の人たちに日本におけるムスリム・コミュニティを引き継いでいくのかという問題があります。 Masjidを舞台にしてこれまでいろんな成果を見ることができますが、創立時の熱意であるとか、あるいは高い意識であるとかを持っている方々が、Masjidを舞台にしていろんな成果を上げてきたことは、我々も見聞きしてきたとおりと思います。しかし、そのような現在のリーダーの方たちが、いずれは引退していく、あるいはいずれは次世代に引き継いでいく時代がやってきます。今後も、現在の非常に活発な活動を行っているムスリム・コミュニティが次世代に果たしてうまく引き継いでいけるかどうか、そういうことについても私たちはいろいろ関心をもって見ていますので、そういったところについても議論の中で取り上げていただければと思います。つまり、今あるMasjid、あるいは今あるMasjidの活動が、将来にわたって持続可能なのか、いわゆるサステイナブルなのか、そういうことについても考えていただければと思っています。

将来的なリーダーの不在は、現在の非常にうまく機能しているムスリム・コミュニティの、言葉を変すけれども、崩壊という形につながらないように、そういった手立てを皆さん自身も、ムスリムの方自身も考えていらっしゃると思いますけれど、そういうことにつ
いても議論をできればと思います。今回のテーマは「地域コミュニティとマスジドの将来像」ということなのでですが、以上述べさせていただいたことを今日参加していただける全ての皆さんが念頭に置いて、これから二本の基調講演を聴いていただければと思います。以上をもちまして私の開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

＜小島＞それでは早速、報告の方に移らせていただきます。「地域コミュニティとマスジドの将来像」という二つのサブテーマが並んでいますが、これについて大塚マスジドと熊本マスジドからそれぞれ30分ずつご報告をしていただきたいと思います。まず、最初の大塚マスジドから報告、ハールーンさんは来ていらっしゃいますけども、アキールさんは今のところわからないので、ハールーンさんの方からお話していただければと思います。よろしくお願いします。

＜ハールーン＞みなさん、こんにちは。ビスミッラー（コーランの朗誦、略）慈悲深く愛深きアッラーの御名において。先ほどの聖典コーランのニサーア（婦人または女）章、第4章36節の文の意味は、アッラーに仕え、他の何ものも並べてはならない、多神教のことをですね、そして両親を大事にすること、隣人には心を尽くし、親戚や孤児、貧しい者、血縁のある隣人、血縁のない隣人、仲間、旅の人々、おまえたちの右手が所有するもの（奴隷のこと）にも。またアッラーは高慢な者は好きではない、ということです。日本イスラーム文化センター・マスジド大塚の活動は大体1993年から始めたのですが、その当時東京ジャーミィもなくて、壊してあったので、関東ではマスジドがなかったんですね。マスジド・モスクでといえば、神戸モスクしかなかった。そのとき大勢のムスリムが海外から来て、イードの礼拝ができなくて困った時期もあってですね、中央のモスクを作ろうという活動を始めました。
　最初にハイテックスという会社を作って、その後ジャパン・イスラミック・トラストという団体になって、その後宗教法人日本イスラーム文化センターになったわけです。1995年に池袋にモスクを借りて、1999年に大塚モスクを購入して活動しております。日本の社会が閉鎖的であることは、全部ではないですけども、もちろん私が田舎に行って非常にみんなにお世話になったこともあります。それから大塚モスクを買ったときに閉鎖的ということを感じて、それだからと言うわけではありません。それから大塚モスクを買ったときに閉鎖的ということを感じて、それだからと言うわけではないですが、いろんな活動を始めました。非常に（社会に対して）オープンにすること、先ほど唱えたコーランのアーヤ（節）もそうですが、それは私たちにとって義務です。近所の人を大事にすること、血縁ある隣人、そうではない隣人、仲間などを義務として大事にしなければならない。だからそういう活動を始めました。先ほどコーランのニサーア章のアーヤを唱えましたが、それだけではなくて色んなハディースもあります。たとえば、ある人がお腹いっぱいに食べて寝て、その隣人が食べずに満たないのであれば、（その人）信者ではないというハディースもあります。天使）ジブリールが預言者＜彼に平安あれ＞の所に何度も来て、隣人を大切にしなさ
いと何度も教えがあって、預言者と彼に平安あれはもしかしたら隣人は遺産相続者になるのではないかと、それほど思ってしまうほどに大事にしないとけない教えですとか、隣人に迷惑をかける人は信者ではないというハディースや信者に迷惑をかけた人は天国に入れないというハディースもありますし、イスラームで誰か、どこまでが隣人かといいますと、ハディースによれば前から40世帯、後ろから40世帯、右から40世帯、左から40世帯くらいが隣人です。たとえば困っている人、食べ物がない人の面倒を私たちが見なければ、それはイスラームではありません。隣人に迷惑をかけて、それはイスラームではありません。

そうしたわけで大塚モスクは色々な活動を始めました。たとえば、阿波踊りという大きな行事がありますが、大塚モスクは毎回参加しています。ムスリムの子どもが阿波踊りで歌うことも数年前からやっております。それに、桜まつりも参加しています。年二回イードの祭りがありますが、モスクの前で警察から許可をもらいお祭りをやって、色々な店を出しています。最近隣の子どもたちがトルコのケバブを買いに来たり、ブリヤニを買いに来たり、女性で最近流行っているのはヘナです。ヘナを描いてもらうために、隣の一般の方も来るようになっています。それからホームレスの支援です。数百人単位でやっているのは去年からですが、それ以前から近くの公園のホームレスを支援しています。昨年くらいからそのホームレスの人は、毎週土曜日にモスクでご飯を作りますので、中には入ってませんがご飯を取りに来るようになっています。それから朝のファジュル礼拝の後に、みんなで道の掃除をしております。そういった活動をやっております。

そうした活動をしていても、モスクができてまもなく9.11事件が起きて、残念ながらもとても日本のメディアではイスラームについてあまりよいニュースがありませんでしたが、とくに9.11のあとかなり偏見がありました。私たちがこうした活動をしていても、一部の人には理解してもらえず、多くの人はそこまで理解してもらえないかったのも事実です。たとえばオープンハウス。近隣の人々に声をかけて、たとえば「何日にマスジドが開いていますか、是非見学に来てください」、またはサウジアラビアから有名な学者が来たときに「聖典コアラムを唱えるときにぜひ参加してください」と言っても、来るのはせいぜい一人、近所の亡くなった記者の方、遠藤さんはパキスタンとかイスラームの国によく取材で行ったことがあって理解のある人だったので、彼がよく来ていたのですが、彼以外は正直誰も来ませんでした。

みなさんが仲が悪いわけでもなかったのです、トラブルがあるとしても駐車場の問題です。それでも気持ちを落とすべくみんなの家前の駐車しないようにしていましたが、時々そのようなトラブルがあったのも事実です。もう一つの問題は土曜日です。土曜日には子どもが集まります。それはとても必要なことです。集まる場所がない、イスラームの環境がない。そうするとマスジドしかかないわけではない。他のモスクもそうですと思いますが、大勢の人が来ます。女性も、大塚モスクでは女性の活動も結構あるので、かなり入りきれないぐらいになることもあります。そうすると子供たちが外で遊ぶ。それは近隣の人には迷惑するのにどうしようかと悩んでいました。
だと思いますが、それは今のところどうしようもないところです。子どもたちによく注意するんですけれども、場所が狭いということでそういうトラブルがあります。

日本人と仲良くなったのは、地震・津波が来た震災の活動がきっかけだと思います。3月11日に地震・津波があって、おかげさまで次の日12日から私たちが現地に行きまして、最初はカップラーメンとかを持って行ったんですが、2回目はおにぎりを持って行きました。それはマスジドの中で女性たちが作ったのですが、それでは全然間に合わない。そうすると近隣の人、商店街の人たち、町会に手伝ってくださいと声をかけて、彼らもすぐマスジドに来て一緒におにぎりを乗せて。ですがマスジドも場所が狭いので、そうすると分けいて、ご飯はマスジドで炊く。それから町会の施設で彼らがおにぎりを作る。それで多くの町会の人たち、一般の人たちが初めてマスジドに入ったきっかけだと思います。来て、普通の建物、普通の人だっただけの人もいます。後で聞いたのですが、実はある女の人が2人いて、女の人がここを通るなら、モスクの前に通らないように注意していたとか、おばあちゃんがよくマスジドの前を通けたということもありました。でも震災の活動がきっかけとなって、その誤解もほとんど解けたのではないかと思います。

今日は私がここをしゃべっていますが、実は大塚町会の会長が話をするはずでした。おこぎりになってその人に用事が入ってダメになって、本当は私よりももうの会長のアキールさんにお願いしていて、今朝アキールさんが「具合が悪いからお前が行ってくれ」ということで、今日私が話しに来ているのですが、こういう意味では町会と非常に仲良く暮らしていると思います。ムスリム人口が増えたというか、マスジドの隣に幼稚園をやっていますので、そのために引っ越してくるムスリムの家族もいますし、よく通っていて、スカーフ、ヒジャーブを被っている女性も増えてきています。それで、馴染んできているんじゃないという印象もあります。時々一般の日本人もスカーフを買いに来ます。どうしてかと聞くと、スカーフを被っている女性をよく見かけて素敵だと思って買いに来たとか。大体もう馴染んできたんじゃないかと思います。

近くの斜め前に西巣鴨中学校がありますが、そこでムスリムが何人も勉強しています。学校からも理解してもらって、たとえばスタッフの礼拝の時間になると、学校側から生徒にマスジドが近いか行ってよいという許可を最初からもらっています。最初は許可をもらうかと思いましたが、校長先生は「全然行ってもかまいません」ということです。今はその学生たちは、お昼休みになるとマスジドに来てズフルの礼拝をして、すぐ帰って弁当を食べます。そういう意味では学校にも非常に理解してもらっています。色々私たちの希望もありますが、たとえばラマダンの時に学校の建物に上って月をみたいという話をしたら、気持ちはよくわからけどもいろんな宗教の人がいるからできませんとか、イードの祭りのときに非常に人が混むわけですね。多いときは700人、800人も来ます。道が狭いから、希望としては、学校のグラウンドを空いている時間でも使いたいのですけど、もちろんです。まだまだそこまで理解するには、時間がかかると思います。

それからもう一つの私たちの活動といいますか、希望は、私たちはハラール認証を出し
ているんですね。特に輸岀向けのハラール認証、特に中東、ドバイの認証機関でもありま
すけど。それを何故出しているかというと、海外でも日本の料理を食べたいという気
持ちが強い訳です。タイという国はとても良い例になりますけど、タイはイスラームの国
ではないのですけど、政府がハラール認証には力を入れて、タイからたくさんのハラール
フードを輸出しているのはとても良い例です。日本でも、日本からも、日本のおいしい料
理を、世界的皆さんにも食べてもらうということも、私たちにはそういう気持ちもあるの
で、そういう所にも力を入れていますし、もっともっと増やしていきたいと思います。

先ほどホームレス支援のことを話しましたけれども、私の希望はですね、ただ彼らにご
飯をあげるだけではなくてですね、彼らは社会的な問題、精神的な問題に関わっている人
が多いんですね。そうすると、そういう支援も少しずつやっていきます、たとえば、福祉
のことを紹介してあげたり、それで区役所の福祉課に連れて行ってったりということもしてい
ますけれども、まだまだ時間がかかるかと思います。食事だけをあげるのも、勿論一つの
良いことですけど、それ以上に彼らの精神的な面倒を見るのもとても重要じゃないかと
思います。

それから老人ホームですね。実は、そこはまだ、努力はしていますけれども成功はして
いない。老人ホームに行って、勿論全ての活動にはイスラームの話は一切しませんし、布
教のことも一切ありませんけれども、それでも、ムスリムの団体として老人ホームのそう
いう活動は今のところ非常に難しい。あと、近くの小さい病院、たとえば山川病院などと
か、小さい病院でのもう一つの活動で、成功していないのはお見舞いですね。よく、そう
いう病院ですけども、大阪から来た患者、名古屋から来た患者、遠くから来た患者がいる
んですね。彼らも、年一回親戚が会いに来るかどうか、という現状ですね。彼らは私たち
が会いに行くと非常に喜ぶんですね。非常に喜びます。

勿論そこには、繰り返して言いますけれども、イスラームのこととか布教とか、一切そ
ういうつもりはなんですねけど、ただ病院側から、モスクの人があとこあとりウェルカ
ムしないんです、まあ、そういうイメージ、一般的宗教を想像しているかもしれないし、
そういうイメージになっているということで、そこは今のところ難しいところですね。だ
から私たちの希望はですね、ホームレスの支援、勿論食べ物もそうですけども、彼らの精
神的な面のサポート、それから、まあそういった病院の、親戚が会いに来ない人々のため
のサポートをしたいのですね。もう一つ、先ほどちょっと話が出ましたけれども、先ほど
スカーフの話をしましたが、時々アルコール中毒の人がきますね。やめたいけどやめられ
ない。それからお金に困っている人も。時々、年に一、二回、信者ではないんですけれども、
相談にはきますね。そういった活動も続けて行きたいと思っております。以上になります。
ありがとうございました。

＜小島＞それでは、少し早く進行しておりますが、まあ礼拝の時間を十分に取れるという
ことで。引き続き熊本マスジドの報告と言うことで、熊本ムスリム協会理事の小嶋雅宏さ
皆さん初めまして。アッサラームアレイクム、ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム。私は熊本マスジドから来ました、アハマッド小嶋雅宏と申します。今から私は、熊本マスジドの紹介と、設備・機能から見る日本のマスジドの課題、というテーマでお話をさせて頂きます。宜しくお願い致します。

熊本イスラミックセンターと熊本ムスリム協会の紹介を二番目にします。そして三番目に、熊本マスジドの活動とその取り組みの紹介、そして四番目にマスジドの設備・機能から見るこれからの課題、そして結語という風に進めていきます。熊本はご存じのように、九州の中心にあります。福岡マスジド、大分の別府マスジド、熊本マスジドが三番目のマスジドです。そのほかに、今鹿児島とか沖縄の方でマスジドの計画があります。熊本は熊本城とか、菊池渓谷、水前寺公園、阿蘇、矢部の通潤橋など、観光の名所でもあります。

熊本のムスリム社会の簡単な歴史をご紹介致します。まずムスリム・ソサエティー@熊本(MSAK)、2000年に発足致しました。2007年の4月に、熊本マスジド・プロジェクトは熊本大学のムスリムの学生によって始まりました。2008年の4月に、MSAKはKIC、熊本イスラミックセンターという風に、定款に基づき改名致しました。そして2008年の5月、この熊本イスラミックセンターは熊本県庁に宗教団体として登録申請をしております。その後、12年の4月に競売により竜神館という物件を落札して、その後一般社団法人熊本ムスリム協会を登記しております。それから、2013年の3月に熊本マスジドの開堂式を行いました。

KICとKMAの関係はですね、熊本マスジドがありまして、KICの方は今、宗教団体です。こちらの方は将来、宗教法人を目指してやっておりますけれど、3年くらいかかると思います。そして一般社団法人の方が熊本イスラミック協会、熊本イスラミック協会です。これは私たちの組織図ですね、KICはプレジデントがいて、バイス・プレジデントがいて、ジェネラル・セクレタリー、ソーシャル・アフェア・アンド・カルチャー・セクレタリー、ファイナンス・セクレタリー、イスラミック・アフェア・アンド・マスジド・セクレタリー、チョイス・オブ・マスジド・コミュニティ、このような色んなマスジドの業務を、皆で分担してやっているのが私たちです。KICが熊本イスラミックセンター、アドバイザー、プレジデント、バイス・プレジデント、テニュア・セクレタリー、オーガナイジング・セクレタリー、ファイナンス・セクレタリー、メンバーズ、シューラ・メンバーズ、最後のところに、イン
ドネシア、バングラデシュ、エジプト、パキスタン、日本、トルコ、マレーシアという風に、各グループのシューラ・メンバーがいます。この次の、ワーキング・グループという風に分けていますけれども、マスジド・インフォーメーション・システム、マスジド・マネージメント、ソーシャル・アフェアーズ・アンド・ダアワ・グループ、レギュラー・イスラミック・アクティビティーズ、リーガルタスク・アンド・ワクフ・マターズ、ファイナンス・アンド・パース、カルチャー・アンド・スポーツのグループ。このように七つのワーキング・グループに分かれています。メンバーの数は一応暫定的でありますが、何かイベントが起こる度に、スタッフがチョイスしてほかのメンバーに声をかけてやっていくというシステムをとっております。

熊本モスクの活動の一つとしてですね、町内会で、熊本マスジドの人たちが、公園の前にマスジドがあるんですけれども、そこで一緒に草取りをやるという。積極的に地域の住民の方と馴染んでいくというか、関係を構築していくことが大事ということを、皆さん意識して、積極的に草取りに参加しております。マスジドの教育として、土曜日のキッズプログラム、アラビア語でのレッスン、タフスィール（コーラン解釈学）、フィクフ（イスラーム法学）、タジュウィード（コーランを読誦するための音声の心得）というように教育プログラムが一日組まれております。

私たちは年に二回から三回、公開セミナーを開いておりまして、これが2011年2月5日、熊本市の国際交流会館の交流ラウンジで開いたものです。世界の動きを知るセミナー、多元的な宗教の立場からということで、カトリックの神父様と、仏教の住職と、キリスト教はフランコ神父、イスラーム教は、私どものクディ・ヤセルさん、九州工業大学に行かれているヤセルさんと、仏教は曹洞宗浄国寺の中山さんと言う方が、私の中学・高校の先輩です。これらの方をお招きして、セミナーを開きました。これは国際交流会館の多文化共生月間の2月の多文化共生イベントの一環として、二階ラウンジで開催致しました。セミナー・オブ・シンク・オブ・アワー・リライ・フロム・マルチ・レリジオージャ・スタンドポインツです。これはフランコ神父、浄国寺の中山住職、国際交流会館の八木さんと、通訳の方です。

またカトリック鹿児島教区の主催研修会に、私と樋口先生とお招き頂いて、講演をさせていただきました。樋口先生が、カールズの導入ということで、カールズの替え歌、日本ムスリム教会発行の日英対訳聖クルアーン発行の経緯、クルアーンの中のモーゼ、キリスト、ムハンマドについて話されました。私は樋口先生と一緒に、入信の動機とその体験、ハッジの概略とその体験について発表させて頂きました。2010年の10月23日に、同じ国際交流会館で、ザ・ハッジ・オブ・イスラームということで、三代前の会長ムシャラブというバングラデシュの方と、アービー・ハキーム前野さんに講演をお願いしました。また、エジプトのムジャーヒドと私が、ムスリムとしての個人的な体験を、ヤセルさんと一緒に少しお話ししました。前後しますが、2008年の7月20日に、熊本大の博士課程にいた方、今メディーナのタイファ大学にいらっしゃいます。あとエジプトのオマル・デスキーさんと
一緒に、私の改宗の動機などの話を一時間ほど頂きました。これも同じように交流ラウンジで開いております。さらにリーム・アフマドさんをお招きして、イスラムの生活ということで、国際交流会館の二階ラウンジで開催致しました。このときは一番参加者が多くて、80名くらい入る所も一杯で、立ち見も出るくらいでした。こちらは諸宗教対話の一環として、先ほどのフランコ神父と一緒にクリスチャンの方々との対話ということで、黒髪地区の公民館で、前会長のエジプトのムジャーヒドとKICのメンバーと、一緒に三時間ぐらいの対話をさせて頂きました。これは佐川先生のアラビック書道、カリグラフィーのワークショップを去年の7月に、開催致しました。

今度はマスジド設立に関してです。いろいろな所にご挨拶に伺いました。熊本市の市役所に表敬訪問致しました。サウジアラビア大使館のオスマン・ビルキアさんとお会いしてお話させて頂きました。このとき、熊本大学の原田副学長とお話をさせて頂きました。子どもが年二回やっているリフレッシュメントの旅行では、菊池渋谷とか、菊池ウォーキングとか、今年は阿蘇スー、バスを借り切って60人ぐらい一緒に行きました。これからの本題です。熊本マスジドの場所は、熊本市の黒髪5丁目、熊本大の黒髪キャンパスから150メートルぐらい。私たちがマスジドを建設する上で一番プライオリティが高かったのは、とにかく一日二回、マスジドで礼拝できるようにするために大学の近くでなければいけないということでした。本当にアルハムドゥリッラー、いい場所が見つかって、竜神館という所です。競売で買うことができました。鉄骨作りの陸屋根三階建て、約100坪、352平方メートル以上です。延床面積が533平方メートルです。既存の建物をマスジドに変えることが多いと思うのですが、新規に購入して建てるのは金銭的にも負担が大きく、私どもは、競売で購入してそれをマスジドにするという方法を考えました。既存の建物を購入したので、我々の予算と物理的な制限との兼ね合いは避けられないものでありました。皆さんのおかげで寄付が集まりまして、アルハムドゥリッラー、マスジドができました。熊本マスジドのメンバーも、皆全国のマスジドに飛びまして、二ヶ月くらい各地をまわってドネーションのお願いにお伺いしました。

建設の前に、建築会社4社の設計コンペ、プレゼンテーションをやって頂いて、その上で、予算の範囲内で最上最善の選択を致しました。導線として建物の入り口が二カ所、階段が二カ所欲しかったのですが、一カ所しかできませんでした。靴箱を二階の女性礼拝室の前に、二階に子供と女性の靴箱を設けました。既存の建物を改修工事なので、消防法、建築基準法などに準じて、二階を男性の礼拝所にするには一階の柱の補強工事が必要とか、いろいろな制約がありました。近隣住民の方への事前のアピールとして、マスジドを競売で買ったあとで住民説明会を開催致しました。検討した課題は、一階の陸屋の上にドームミナレットを作って欲しいということと、二階の拡張工事、駐輪場への通路。アルハムドゥリッラー、今ある場所はどう区画整理というか、道路の拡張工事がありました。ちょうど私たちはマスジドが、ちょうど道の角にあるようになります。私はドームミナレットの色は緑、外装の塗装は周囲の町並みに合わせた色に、アラベスクの装飾をミフラーブの
周りに、ミンバル、多目的ルームの設置、礼拝室のカーペットなどいろいろな検討課題がありました。また南側の住民の方々に対して、集合アンテナを立てて、テレビの映りを良くするということをしました。それから古い建物だったのでアスベスト検査をしました。その結果、アスベストはネガティブでマイナスということで、工費があまりかからずに済みました。アスベストがないという公的な機関の証明も得ました。竜神館の時には違法建築物があり増設されていた部分を撤去しました。

住民説明会を公民館で開催しました。その時は20名ほどの地域住民の方が参加されて、私と、今ムスリム協会の会長のエミール・オムルザク先生と一緒に参加し、アンケートを配り回答していただきました。この時一番多かったのは、ステレオタイプなムスリムに対してのネガティブな、テロリストじゃないのか、たとえば布教するとき、一軒一軒回って布教するのかなど、いろいろな質問が出ました。その質問に対して丁寧にお答えしていて、少しは理解が得られたかと思います。

設計時、設備と機能を含めて、まず多目的室、これはマスジドでのセミナーの開催、タブリーギー・ジャマーアト（イスラーム復興改革運動とその布教組織）の方などの多数の宿泊、あるいはイフタール会場としても利用できることを考えました。女性用のトイレには可倒式のオムツ台を設置、女性用の礼拝室の前にはインターホン、入り口のままにはドアを開けてもすぐ見えないようにカーテン、女性の礼拝室の奥にキッズルーム、母子のための設備を併設致しました。三階の住居スペースは、マスジドのランニングコストを捻出するために、個室は貸せるようにあります。三階の住居スペースは、マスジドのランニングコストを捻出するために、個室は貸せるようにあります。一旦は貸し切ったものの、新しいマスジドのために、借り受けたものです。個室は、ゲストと滞在用に使用しております。

ここで、写真をお見せ致します。これは熊本マスジド。去年のイードの時の写真です。これは私たちとエミール・ウンムッラー先生。マスジド会議の時に熊日新聞と毎日新聞、朝日新聞と地元のテレビ局が取材に参りました。この間、地元のテレビ局でKKTというところで、2,30分ほどエミール先生の家に訪問して、そのあと、熊本マスジドにも取材にお見えになりました。これが左側から見た熊本マスジド。これがウドゥーの場です。ここは、特にICOJのイサーンさんというパキスタンの方がいて、特にこだわりがあります。この傾斜は水が跳ね返ってこないようにと考えられて設計されております。洋服掛けなど、トイレはウォシュレット式が三つ、和式が三つ、ちゃんとシャワーもついております。これが事務室です。

これは二階の女性の礼拝室、こっちから入っていくようになっています。女性の礼拝室の入り口にはインターホンをつけ、顔を合わせずにお話ができるようになっています。これが二階の女性の礼拝室の前と、二階の女性の礼拝室です。このテレビは、一階のイマームの姿を映すようになっています。女性の礼拝室の奥にはキッズルームがありまして、高い位置にありますが、お母さんたちから子供さんのらの姿が見える。お子さんたちはこちらのなかで、遊んでもらえる。窓には柵をつけます。これは女性用のウドゥーの場です。
入り口の所は両方とも一応カーテンをつけます。女性用のトイレには一応、可倒式のオムツ台を設置しております。これが一階のミフラーブのところで、こっちにミンバルがあっ
て、こっちに移動できるようになっています。ここが一階のイマームの部屋。アザーンの
声とかが二階に届くようになっています。これが二階に映るようになっています。三チャ
ンネルあって、玄関の入り口の所二カ所、セキュリティーのチェックができるようになっ
ています。これが二階の Wi-Fi、あとプロジェクターのケーブルです。

これは二階の調理場です。特にイフタール用に、業務用の火力の強いものを設置してい
ます。ラマダーンの時は毎日、パキスタンの方やインドネシアの方など、皆さんこぞって
イフタールの用意をして頂きました。これは、三階のイマームの部屋です。冷蔵庫などを
設置して家族で住めるようになっています。これはイマームの部屋のリビングですね。奥
と二階屋あります。これは、個室の中の一つで、IHのクッキングヒーターと流しと、
トイレはウォッシュレットやシャワー、あとマスタバ（ベンチ）は置かれませんでしたが、
シャワーとトイレとはこういう風に設置しています。各部屋のメーターは個々についてあ
ります。これは一階の礼拝室です。男性用の礼拝室です。これが事務所の書庫です。ここ
が事務室です。設計のときにどうしてもキブラの方向を向かなければいけないので、礼拝
のカーペットの並びがこうなっています。約 140 人は入ると思います。今、金曜礼拝の時
に、男性だけで 70 から 80 名ぐらいと、女性も 10 名前後です。ここがご遺体を清める場
所。これが二階の多目的室。ここが女性の礼拝のスペース。奥がキッチン。ドームとミナレット。既存の所に、うまく具合にドームとミナレット
を設置することができました。

結語と致しまして、私たちが言いたかったのは、キーワードは情報開示と透明性にあり
ます。本当に私たちのお金の出入りや、ドネーションの関係などを、エクセルのシートで
メーリングリストに流して、みんな誰でも参考にすることができます。全てのことはシュ
ーラ・ミーティングで決定されて、その通りにちゃんと守られていっています。私たち一人
一人の思いや願いを共有して、情熱を持って同じ方向に進んでいくということと、マスジ
ドがイスラーム文化と日本社会における価値の邂逅の場であるために、私たちは積極的な
努力を怠らない、ということで、私の発表を終わりにさせて頂きます。ご静聴ありがとうございました。

＜小島＞ハールーンさんが 5 分以上早く終わってしまいましたので、ちょっと急かせて
しまって申し訳ありませんが当初の 30 分をお願いしたということで、ご了承頂ければと思
います。では、まだ 2 分ぐらい早いですけども、休憩と礼拝、サラートの時間にしたいと思
います。サラートは四階の共同研究室 1、2 に男女別になっていますので、そちらの方へ
お越し下さい。では、3 時 15 分に再開致しますので、それよりちょっと早めにお戻り頂け
ればと思います。
＜店田＞福岡モスクの中村さんより、参加者の皆さんへのお土産として福岡市の銘菓「鶏卵素麺」をいただきました。休憩室に置いてございます。ハラールですので、皆さん是非、ご賞味ください。
パネルディスカッション

＜店田＞パネリストについてはあとでご紹介致します。最初に、福岡マスジドの方からご提供頂いたテレビ番組の一部について、関連する部分のみ、最初に流させて頂きます。これを見て頂いたあとに、実際のパネルディスカッションに入りたいと思います。それでは、お願い致します。

＜VTR＞去年瞬く間に流行語となったこの「おもてなし」という言葉。しかし日本では今、あることがきっかけで、イスラーム教徒への「おもてなし」が注目されていることは、あまり知られていません。博多駅近くにある一流ホテル。利用客に外国人の多いこのホテルでは、朝食の際に、こんなものが準備されているんです。「当ホテルでは、豚肉を使った料理に、豚のイラストを付けてわかりやすくしております」。これは、豚肉を食べることが禁止されているイスラーム教徒の利用者へのサービス。特に、朝食のビュッフェは自分で料理を取るため、うっかりを防ぐために、イラストで表示をしているそうです。

実は今、このようなイスラーム教徒へのサービスが、日本で広がりを見せているんです。長崎県・ハウステンボス、ホテルヨーロッパにやって参りました。こちらではムスリムのお客様に、あるものを準備しているそうです。外国からの集客に力を入れるハウステンボス。九州・山口エリアで、いち早くこんなサービスを開始しました。「すみません。こちらで、ムスリムのお客様に準備しているものを」「えー、まず礼拝用のマット。あとこちらがキブラ・コンパスと言いまして、メッカの方向を示すコンパスになっています。もう一つが、あちらの方々の習慣として、用を足したあとに必ずその部分を水で流すという習慣がありますので、それに対応したジョウロでございます。」

戒律が厳しく対応が難しい、というイメージがあるイスラーム教。何故、今観光業界はそのイスラーム教徒へのおもてなしに力を入れ始めたのでしょうか。イスラーム教徒は世界におよそ16億人いるとされており、意外なことに、その6割は、東南アジアと南アジアに住む人たち。そして、そのエリアにある5カ国（ベトナム、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア）では、去年7月、訪日ビザの発給条件が緩和されたため、今、旅行で日本を訪れる人が急増。中でもマレーシアとインドネシアは、特にイスラーム教徒が多い国なんです。「国際的に見てもですね、東南アジアの方々の移動が増えている。ハウステンボスとしても、そのようなお客様をどんどん受け入れていく必要があるんじゃないかというところで、イスラームに対応しなければいけないと。そういうところから、今回このようなことを始めております。」「いつ頃から始められたのですか。」「10月の23日にですね、実際にムスリムの方々にお越し頂いて、簡単なセミナーをして頂いてですね、我々はムスリムの文化を理解しますよ、できるところから対応していきますよ、とううそういうところから始めて貰うのが、あちらとしても一番嬉しい、ということだったので。まあ我々も、できるところからやっていこうと。」
このように、日本人にとってはまだ馴染みの厚くないイスラーム文化。しかし、このイスラーム教徒の男性に聞いてみると、「イスラーム教徒にとって、ほとんどのものが禁止されているものが少しだけと言われたりしますが、実は逆で、ほとんどのものが許されていて、それ以外のものはそうじゃないんだと。そのことを理解して頂いて、イスラーム教徒と一緒に生活することで、それほどむずかしいことじゃないですよ。それから理解して頂いて、イスラーム教徒と一緒に生活することって、それほどむずかしいものではないんだと。それから理解して頂いて、イスラーム教徒と一緒に生活することって、それほどむずかしいものではないんです。」

ここは、福岡市東区にある、九州初の本格的なイスラーム教モスク、福岡マスジド。古城さん、ここに通うイスラーム教徒の一人です。きちんと情報発信しようと、一般の方には勿論、観光業や地方公共団体を対象にした、ムスリムフレンドセミナーを開催しています。その内容、たとえば、九州・山口に多い温泉の場合…「ムスリムは家族以外に肌は見せません。しかし家族風呂なら大丈夫、温泉は好きですから。」「ああ、そうですね。」他にも、野菜や魚は問題が無く、果物なども好まれるなど、特別にイスラーム化するものではなく、日本にあるもので十分おもてなしができると古城さん言います。「まあ確かにその、宗教なので、対応が間違ったらはああと思うんですけど、そこはやっぱり人間なので、まずは信頼関係。特別なことをしてくださいというのではなくて、まあ、知識は皆さん、イスラームに関する知識を持って頂いた上で共に協力して、こんなに簡単にお互いがハッピーに暮らせるようになるんですよということを伝えたいですね。」

世界人口の2割以上を占めるイスラーム教徒。それはこれからのおもてなしビジネスにとっては、大きなマーケットになるのは間違いありません。しかし、違うのは当たり前ということも認め、お互いが理解を深める。それこそが、真の「おもてなし」につながるのではないでしょうか。
ありましたように、熊本マスジドがこれからどういう形で運営していくかということを考えた場合に、宗教法人ということが言えました。マスジドの将来像ということとも関連するところですが、古城さんは福岡マスジドにおいて、宗教法人化について、かなり中心となってお働きになったということで、いろいろなことを存じます。そのあたりを含めて、これから今ビデオにあったハラールのことについても若干触れさせて頂きながら、まず10分間程度、口火を切って頂ければと思います。お願い致します。

＜古城＞宜しくお願いします。まず宗教法人化のお話ですけど、宗教法人は各県が許可を下ろす形と、県をまたいでの包括的な宗教法人という二つの形がありまして、宗教法人は不動産の固定資産税などが免除になる。いろいろな優遇があります。それでよく他県のマスジドの方たちからも、包括的宗教法人を作って、それで他の県に新しく作る時にその建物あるいは土地の税金を免除して貰ってはどうかということを開かれます。しかし、私とここにいる中村さんとで行政の方に聞きに行きましたら、包括的宗教法人を作ったしても、その土地や建物が果たして本当に有効に、その団体の財産として宗教的に使われるか、という判断をして貰うのが非常に難しいといいます。なおかつ、その包括的宗教法人を許可して貰うというのが非常に大変な手続きになるので、それならば各県で認可を受けてやった方がいいという風に、私は現実的には考えております。また、どこのマスジドもそうだと思うんですが、ランニングコストというもののがやはりかかるので、それをどうやって捻出するかということは、ドネーションだけでは厳しいというのは多々ある。どのマスジドでも直面することだと思います。

さきほど大塚マスジドの方から、老人ホームへの訪問ということをおっしゃっていたんですけれど、先週の日曜日に、別府マスジドの代表の、パキスタンのターヒルさんが相談に来られました。私自身が介護の業界にも関わっております。冒頭で話題に上がりましたように、ターヒルさんも、私もそうですが、今後永住する方とか日本にずっと住み続ける方というのがいるとすると、ムスリムたちも当然ケアを取ります。それで、介護が必要になる。そんなときに介護施設が必要であるというのは当然出るべき話であると思います。私自身の考えでは、既存の介護施設は、日本人、あるいは在日の方、在日朝鮮人、韓国人の方たちは利用されているケースがあると思いますが、それ以外の外国人の方が利用するというケースはなかなかない。というか、現在私は聞いたことがない。そんななかで、ムスリムを受け入れるとなったときに、当然ハラールの食事の問題もある、礼拝の問題等もある。それならば、なんでインターナショナル・デイサービスのようなものを作って地域の中で、というのは、私自身が老人ホームというのが非常に嫌いなんですね。地域に住んでいて、そこに閉じ込めのではなく、地域で生活して、昼間はそこに通って、夜は自分の家に帰るというのがライフスタイルとしてはいいと、私自身は考えています。そういうものを作りたい。それはムスリムに限定しているものではなくて、インターナショナルな、老人ホームではない、デイサービスを作りたいと思っています。それで希望としては、ビルがあ
って、下の階にデイサービスがあって、二階に保育園のようなものがあって、食堂、キッチンがあって、キッチンでデイに使うものや保育園に出すハラールの食事を一緒に作るという、そういうまとまった施設を作って、そういうもので、デイサービスを行う。介護保険も出ますし、介護保険に加入すれば負担もそれほど大きくない。そういうものでランニングコストを稼いでいくという方法も考えられと思っています。

冒頭で出ました埋葬の問題。埋葬の問題ですが、私と中村さんは結構頻繁に熊本県の人吉市に通っております。理由は、人吉の方がムスリムに優しい町作りというのを始めて、手がけているためです。そういうプロジェクトチームも市役所の中で出来上がっています。経済特区のようなものも作ってあって、そこに色々、ムスリム・フレンドリーの企業を誘致しよう、ハラール関係の企業を誘致しよう、完全なハラールの工業団地のようなものを作ろうとしてくれています。そういう流れで町の人たちに理解が深まれば、もしかしたら埋葬ということに対する考え方も非常に緩やかになるのではないかという風に、市長さんもおっしゃっていました。

＜店田＞ありがとうございました。今、幾つか高齢化に関連して、デイサービス、それからその中でのハラールということが、問題になりました。もう一つは、人吉の事例ということで、ムスリム・フレンドリーな町作りをやっている人吉というところで、そこでの埋葬、あるいはハラールということが関わってくるわけですが・・・。

＜古城＞すみません。もう一回。先ほど見て頂いたDVDについて、まずハウステンボスが出ていたと思うのですが、我々が、ハウステンボスでもムスリム・フレンドリー・セミナーというのを行いました。そこで、我々が提案をしたジョウロのことなど、我々がアドバイスをさせて頂いて、それが取り上げてもらえたという形になっています。イスラーム教の知識をとにかく持ってもらった上で、一緒に暮らすことはそれほど難しくはないということ、ハラール、ハラールということですが、ハラールは当然守らなくてはいけませんが、それが非常に難しいもの、という誤解をしてもらいたくないというのがあって、我々はムスリム・フレンドリー・セミナーというのを行っています。ありがとうございました。

＜店田＞ありがとうございました。ハラールのことが最後に出ました。将来像ということで話を進めていく前に、ハラールのことは、ビデオでも、今の古城さんの話でも出ましたので、もう一つ、先ほど大塚の方でもハラールということで色々活動されているという話がハールーンさんの方向からございましたので、若干補足することがあれば、そのハールーンさんの方向からも、お話をお願いできますでしょうか。

＜ハールーン＞そうですね、今、よくテレビ、メディアでハラール、ハラールといっています。ある意味では、日本でもとてもハラールについて考えている。ビジネス的な考え
あるとしてもですね。それはある意味では非常にいいことでもありますが、先ほどビデオでも出たように、イメージとしては、ムスリムの食べ物は全部厳しいという意味ではない。そうではなく、ほとんどのものは大丈夫ですけど少しだけだめだ、ということです。昨日、大塚マスジドである女の人が来ました。その人の話を聞くと、近所の人が石鹸を持ってきて下さったという。この石鹸を良ければ使ってください、という。でもハラールマークはついていない。使えますか？といわれたのですね。ちょっとその話を聞いて私も心配になってきましたね。何でもハラールマークがないとだめだというイメージになっていく日本の社会になってくると、ちょっと良くないと思います。ハラールは最近、特にホテル、レストラン、輸出している業者、国内の業者も少しずつ、皆意識するようになっていいる。ありがたいことではありませんけど、ちょっと心配なところもあります。

＜店田＞はい。ありがとうございます。ハラールについて、まだ色々お話をあると思いますが、限られた時間ですので、幾つかテーマについて、それぞれお話を頂きたいと思います。ハールーンさん、もう一つ、古城さんから先ほど埋葬のことをお話し頂きました。大塚マスジドではもう既に、イスラーム霊園を取得したという話を聞いています。それについてお話頂けますでしょうか。

＜ハールーン＞そうですね。皆さんご存じの通り、山梨の塩山というところで日本ムスリム協会がずっと前からお墓を持っていて、その横に文殊院というお寺にもずっとお世話になっています。しかしそれだけでは足りないということで、ずっとムスリムのいろんな団体が一緒になってお墓を探しておりましたが、新しいお墓を造ろうとするとなかなか許可が下りません。去年、それではもうどうしようもないと思って、茨城にある谷和原というところの霊園に、一部使っていない霊園があって、そこに壁を設けて去年からお墓をやっております。お墓代は、今のところ無料にしています。お金はかからない方針でやっております。ただし穴を掘ったりプレートを付けるためには12万円ほどお金がかかります。実際にかかったお金は亡くなった人の側から頂いております。茨城といっても、大塚から約53キロと近くの方です。ですから関東の人たちは一安心ということになりました。それでもではなく、茨城の他の場所にもあります。ICOJは栃木でも運営しています。ムスリムの墓として造られてはおりませんが、その他、三重県や北海道でも利用しています。あちこちお寺にお願いしてお世話になり、一部を利用することが最近増加しています。あと福岡でも計画が進められています。

＜店田＞はい。ありがとうございます。ICOJの方でも、今ちょっとお話の途中で出ましたけども、埋葬・墓地に関連して活動があるそうで、アブドゥッサマドさんの方からもご発言頂ければと思いますが。
＜アブドゥッサマド＞私の仲間はアマヌキさんといって、住んでいる栃木県の所に霊園がありました。私がびっくりしたのは、最初に、ある方が亡くなったら、埋葬しようとしてそこに行ったんですけど、ちゃんとイスラーム式の霊園が元々あったのです。それを管理している人たちは勿論日本人だったのですが、ちゃんとしたムスリム式のカブル(qabrアラビア語で「墓」の意)があったんです。その家族とアマヌキさんが管理している人と話をしました。実は私たちもお墓のことでとても困っています。ここにお墓を買いたいと、興味を持っているんですけどどうですか、と。そうしましょうら、いいよ、どうぞどうぞ使ってください、と。それから、そこで十箇所ほど、お墓の用地を買いました。いま多分、2、3人ぐらいはそこに入っています。そこで、売っておりますので。住民とムスリムの間でお互いに理解したところで、もう少し墓地が増えると思います。近隣の住民からは文句や苦情も無いので、速やかに入れてもらえると思います。

＜店田＞はい。ありがとうございました。栃木のケースですけれども、地域との関係の中でそういうものが可能になっていくということでした。埋葬・墓地ということに限らずに、地域と非ムスリム社会とのつながりということに話を移して行きたいのですが…では、ハールーンさん。

＜ハールーン＞（会場内の仲間に問いかけて）早稲田の近くで見つかったムスリムの墓は何という墓地でした？この間お墓が見つかったのは。——雑司ヶ谷霊園ですね。近くに、一つのお墓が出てきて、調べたらちゃんとムスリムの名前がでてきて、ムハンマド・イブラヒームと。100年前の墓ですね。ですから100年前でも、東京でムスリムがちゃんと土葬されたということです。東京都では、誰も関係する人がいなければもう処分するということだったんだけれども、私たちがちゃんと、続けて管理費も払いますということで、もうずっと、これからも使えると思います。関係のない話ですが、ずっと前から東京にはムスリムの人がいたということが分かりました。

＜店田＞はい。雑司ヶ谷霊園ですね。多摩霊園というところにももちろんムスリムの方が埋葬されているということです。雑司ヶ谷霊園の具体的なことは私どもも知らないので、また改めて別の機会にお聞きしたいと思いますが、それでは地域ということに少しお話を移して行きたいと思います。非ムスリム社会とのつながりということで、もう一方の福岡マスジドから来て頂いた中村さんの方から、地域との関わりでお話をいただけますでしょうか。

＜中村＞はい。福岡マスジドで、事務局長と幹事、あとリーガルアドバイザーをしております中村です。法人化を含めた感じで、地域とイスラーム共同体の将来について、簡単に素描をしてみます。福岡マスジドが法人化をする際に、県の方からの要求は、とても厳
しかったらしいです。そのなかででてきたのが、役員に日本人を必ず入れてくれ、ということです。特に代表役員は、ころころ変わってもらっては困るということです。これは何かというと、その宗教法人という資格を取れば、社会的にある程度責任を持たなければならない。あと地域との関わりも当然出てくるという。法人が持つ社会的役割を果たせるかということで、日本人がいる、ということが要求されました。これはどうかというと、今、休眠法人などがいろいろあります。建物や地域の孤立、地域との衛生・環境とのバランスが保てないような状況が一杯出てきます。日本人がいれば何とかその辺りはできるのではないかというのが、県の指導の眼目であったようです。

これから皆さん、色んなモスクが建つということと、それが建った後に法人化を目指すということにも共通すると思いますが、地域とどうやって共存していくか、あるいは孤立せずにやっていくかということは、とても、日本人を含まないと難しいような状況ではないか、という気もします。大塚マスジドさんはうまくされているようで、長い歴史があると思います。日本人の持つ価値観とか、地域コミュニケーションの取り方ということで、どうしても日本人が必要になってくるようですね。あと、町内会や地域の学校との取り組みもあります。そこにまずフロントに立つのは、私たちの場合は日本人です。日本人が立った上で、双方の価値観をうまく調整して、いい方向に持って行こうという風に今、やっていきます。

私たちも年が年ですので、次の世代を育てなければいけない状況でもあります。そういう点では、教育ということにも関連してきます。教育に関しては、イスラーム・オンリーというのは正直に言って難しいと思っています。やはり日本社会で卒業して、日本の社会に出て行くならば、そこには日本の学校教育に基づいた教育も受けた上で、そしてイスラームの価値観、宗教的なハートを持った人が育ていかなければならないような状況です。ここ10年や20年では簡単にいかないような状況です。今私たちが考えているのは、まず幼稚園からの教育。それと、日曜学校的なことでイスラーム教育をやっているということですね。基本的には地域からの孤立をなるべく避けて、共存共栄と言う形でやっていく、というような形です。簡単ですが。

＜店田＞はい。宗教法人として今活動しているのは、文科省からのデータですと、包括法人は大塚マスジドさんを含めて3つ、それから単独のものが11ぐらい活動していると思います。宗教法人化ということはこれからも他の、熊本を始め色々出てくると思います。それから中村さんのお話の中で教育、あるいは学校の問題と言うことがありました。マスジドとして教育に取り組んでいるということは勿論ですが、日本の学校への働きかけという点では、どのようなことが、福岡マスジドでは行われているのでしょうか。

＜中村＞幸いなことに、留学生が多数を占めており、そちらのご子弟が送られている学校もう、15、6年以上、対応してくださっています。その学校の中にワールド・ルーム
ようなものを作って頂いて、まず言語的なこと、生活的なことをフォローしてください。そして礼拝時間に関しては、マスジドに来ることもできますし、学校の校長先生の部屋を借りて礼拝できるようにもして下さいます。それ以外に、学校の先生が転勤して来られますが、そういう先生方に対しては、夏休みの研修ということでマスジドにきて頂いて、イスラームの基本的なお話をレクチャーすることで、交流を図っています。

＜古城＞すみません。教育とは直接関係ありませんが、私が関わってる外国人の方で、日本語でのやり取りが難しい方もかなりいらっしゃいます。そういう方と、その方の国の言語が話せ、日本語も話せる通訳の方と、私が一緒に転入手続きをしています。あと、今マスジドの近くの学校については、マスジドに話を聞きに来て下さるというのがあるのですが、遠いところもあり、市内じゃない学校もあるので、そういう学校には転入手続きをしに行き、給食、ハラールのことは、福岡市内の学校はこういう風に対応してくれていますよ、とか、その方への日本語教育についてはこういう風に対応してくれますよ、ということを説明しています。そうしないと学校側も非常に不安な気持ちになりますし、そういうことをマスジドとしてやっていきたいなと、もっといける体制を整えると非常にいいのかなと思います。

＜中村＞あと、こういうことに関しては教育委員会が動いてくれません。教育行政だけではそういう特殊な、特殊というのもおかしいですが、個別的な対応に動いてくれないので、先生方と強いコネクションをつくります。そして先生方から、今度は口コミで広めて皆さん、変を変えられますので。こういう生徒に対してはこの福岡マスジドが対応してくれるからということで、情報が少しずつ広まって、中学・高校の社会科の先生などが、わずかにマスジドに来て頂いて、イスラームのことを勉強したり、あるいは興味があるから先生の紹介でマスジドに来たい、という形で、イスラームのことは、少しずつですが認知が高まっている状況です。

＜古城＞学校側にイスラームのこと、イスラームのご子弟への対応で分からないことがあったらとにかく福岡マスジドに聞いて下さいということで声をかけて、学校側にもそのように対応して頂いている状況が、どんどん広まっているということですね。

＜店田＞はい。ありがとうございました。今の話を受けてですが、熊本マスジドも先ほどのご報告にあったように、宗教法人化ということが将来の目標として一つありましたが、あるいは教育や地域との関係について、既にいろいろと活動しているという報告もございましたが、福岡マスジド、あるいは大塚の報告を受けて、熊本の方だからご発言頂ければと思います。まずエミル・オムルザクさん、いかがでしょうか。
At first time, thank you for the organizers that this is very useful and a very helpful event and it’s my first time to participate in these meetings. I try to – before coming to try to learn something about this meeting and I was a little bit confused in the beginning whether this is meeting rather than it’s Waseda University and then in the other side is the masjid and what is the connection and that was when I heard this meeting is going on to be held and it seems it’s already begun and I try to read some of the previous reports.

I think it’s very useful and I hope it’s going to contribute to both of us, so in that sense I would really like to see the representative of the scholars of Islamic and from the viewpoint of Japanese universities to give us the real advices. I think now you know the situation of Muslims in Japan, more than us maybe, because we have the rights meeting like this and many representatives come here and give their reports on what they are doing about getting the things to be done.

In that sense, I think, of course you know that we have quite a lot of problems to overcome.

It’s not easy and mainly I think most of the masjid now is running on the voluntary basis and there’s no such a big organization behind the masjid or there is no such a big support behind that. And mainly the force is there are the students coming to study in Japan, like from the Muslim countries.

It’s just like me. I am from Kyrgyzstan and we have Muslims. So I wanted to – how to say – as a representative of the Muslims, we wanted to make the life of the – to meet the needs of the Muslim society there and, of course, we have the lot of problems to solve and we didn’t know how to solve it and in that case maybe if we can have some meeting like this, it would be very helpful, we can learn the experience from each other and we can learn from the opinion of the local society. It’s very important for us, especially for me.
I was really pointing the stressing on this because we have to take concern about the local community, the local societies in order to communicate, in order to know each other. If we don’t know what is their opinion about us and what’s our opinion about them, then it’s really difficult to go in one – to come into one point or to understand each other.

So, from the beginning we started like to learn from those who had already experienced from the masjid – started the masjid – how did they started, how did they opened or registered their organization, what was their situation and how was the problem solved, and then I think we didn’t do the very complicated complete research but we needed this to know and we had kind of a questionnaire or we had – get help – get support from the already established masjids in terms of the legal representation and first we had called Raza Habib (?), including him, and to get the advice what is the best, what is the – the law is saying, what is our need, so that’s the place where we had already a problem.

And we had also the – they asked as well to Mr. Masahiro Kojima, who told you in the presentation, we tried to get the information from the first sources, like City Hall or like the community leaders there where we want to build this masjid and before building we wanted to make sure that it’s not going to make any problem and sometimes we had a very good success, sometimes they supported us, sometimes we didn’t – we get confused what is the best solution, but you know, if – how to say – our efforts made some good results.

I think also they are concerned that the – the common sense concerns of the people, it’s not a big problem to find out what is the common sense of their concerns, where we want to make our masjid like – I’ll be also concerned if some foreigners come near my location and build their building and do their gathering there without telling to the authorities or without telling to their neighbors and we started to approach the community leaders there and I think that was the beginning of our communication and they also understand. There is no big problem in our living.

If we tell our feelings, our plans or what’s our concern, they will also tell us what is their – how to say – what they want to see from us. So, then we can
make our general solution and I think regarding the legal representation or other things, I don’t have the knowledge about that and actually we asked Kojima-san and Kojo-san to help us in these things and we want to make it in a professional way and we don’t want to make any mistake in these things. So, in that sense it’s better to ask the professionals.

Of course, there are some problems and there are something that we can easily get or sometimes it’s very difficult but there is a way and we are always trying to solve the issues in an acceptable way and I think that’s my opinion if it is like it’s very general but mainly our point is we should always concern the local community’s opinions or we should always consult with those who have already experienced and those who are – we are living with. In that time it’s very easy to stay with other humans.

＜店田＞はい。ありがとうございました。全部訳すわけではありませんが、いろいろこの会議に対する期待、評価、あるいは先行するマスジドから学んでいきつつ将来を考えていくということ、あるいは町会、地域の町会のリーダーたちとの話し合いの経験、そういう中で、成功することもあれば失敗することもあり、色々な状況があったけれども、実際にマスジドができていったということで、それを収めてきたということだったと思います。リアルな宗教法人化については、大塚や、あるいは福岡の経験というのは貴重なものとしてありますので、そういうものを活かしながら取り組まれていくということだったと思います。熊本マスジドの方で、先ほどご報告頂いた小嶋さんからも、追加するような形でご発言頂ければと思います。

＜小嶋＞はい。教育のことについては本当に、私たちは今後考えていかなければならないもののと同様に取り組んでいます。そして、私たちのマスジドがある黒髪という地域には、留学生がドミトリーや、近くにおよそ150人ほど住んでいます。それで、その子供の行かれている学校、黒髪小学校などが近くにある二、三校ありますが、そちらの先生方は例えば、いじめにありないようにとか、食事のことについても本当によく配慮頂いています。それから、国際交流会館の八木事務局長さんという方がいらっしゃって、そういうところでもまだハラールとまではゆきませんが、ムスリムフレンドリーな環境を作るべく、尽力して頂いております。以上ですね。

＜店田＞はい。ありがとうございました。たくさんの課題について色々お話が出ておりますが、まだご発言頂いていないパネリストの方もいらっしゃるかもしれません、またさらにテーマを他に移して行きたいと思います。これまでハードといえますか、宗教法人の話
が出ておりましたけれども、今度はソフト的な部分で、既に色々お話が出ている学校や教育の問題、それから私が挨拶のところで申し上げたような第二世代、第三世代の問題とも関連すると思いますし、そのあたりについて、行徳からお越しの前野さんの方から、教育を中心にして、まずは行徳の取り組みについて、あるいは既にお話し頂いた他のマスジドの方のご発言を踏まえて、何かありましたらお願いしたいと思います。

＜前野＞アッサラームアレイクム。皆さんこんにちは、行徳マスジドから参っております前野です。行徳マスジドの活動としましては、これまでには定期的なイマームさん、マスジドの指導者の方がおられましたので、イブニングスクールというような形で、子供たちにとっては大変なことだったかと思いますけれども、子供たちが通常の学校での学業を終えた後、平日、月から金までですか、夕方 6 時過ぎから 8 時過ぎくらいまでの時間帯に教育活動をやっていたようです。一時、ワンタームだけ、講師の一人として私も参加させて頂きました。ただあいにく、中心的にやってくれていた先生が、その人の事情から行徳にいなくなってしまってからは残念ながら、そのイブニングスクールという形では、継続されていない模様です。

一方、私自身が、一人のムスリムの父親、四人の子を持つ父親として課題意識を感じながら、2010 年から始めております週末学校、日曜学校という形での活動としましては、基本的に毎日曜日ですね、午前中 10 時半から 12 時頃まで、続けております。課題意識と申しましたのは、イブニングスクールにやってくる子供たちの表情を見ているときでも、仕方が無いとは思われるんですけれども、日中学校で勉強した後、またほとんどの子が親御さんに連れてこられる、という形でやってきたのでとても疲れた表情をして、話弊があるかもしれませんが活き活きとした顔を、雰囲気を感じられないと、これではマスジド嫌いになってしまうとか懸念を抱きまして、できれば子供たちには詰め込み式のものではなくて、マスジドに来て、みんなで学ぶこと自体が楽しいことなんだという思い出作りの一環も込めまして、週末学校というものを始めた次第です。

週末学校では、ナシードというイスラームの宗教的な歌ですね、宗教歌から始まります。ムスリムであればおぞろく皆、口をそろえてクルアーンからどうして始めないの、と言うと思いますが、確かに元々はクルアーンの練習から始めていたんですが、遅れてくる生徒が多いものですから、できれば皆にクルアーンの練習をして貰いたいということで、みんながやってくるまでの時間ですね、最初にまずそのラシードを充てまして、続いてクルアーン、それから短いハディースや、お話、ストーリーテリングの時間、そしてイスラームの実学、法学的な事柄、どういう風にお祈りをするか、お浄めをするかなど。それから今日ここにも来てくれていますけど、シリアのアレッポ出身のターリフ先生が、アラビア語の授業を担当してくれております。実学の一環として、ムスリムにとってアラビア語という言葉は非常に大切なものですから、それを子供たちにも学んで頂く機会を設けております。
＜店田＞はい。一旦終わりにして、他のマスジドに、活動について何かご発言があれば。

＜前野＞福岡、とくに、古城さん中村さんがご発表なさいました学校の先生方へのアプローチというのはなんと言いますか、すばらしいなと思わせられました。そして私たちもまた大いに学んで行きたい、行くべきだと思ったわけですが、いかんせん、渋まいこと

に福岡には、日本人、日本出身のムスリムで動いてくれる人が、少なくとも行徳より多くいらっしゃるようで、頑張っておられるのだなあと、感心、敬服する次第です。一方、

行徳では非常に、そういう人間が限られておりますので、私のはずと致す所ながら、そこまで、全部手を回してこれなかったので、できるだけこれから、そういうアプローチにも、

時間と力を注いで行きたいと思う次第です。

＜店田＞はい。ありがとうございました。週末学校ということで、最初にナシードということがお話に出ました。私も先ほど YouTube で具体的に見て頂きました。ここにはムスリムで分かる方もいらっしゃいますが、非ムスリムの方にはほとんど分からない、初めてのことと思いますので、もし宜しければ、実際に

ナシードを、ご披露頂けないでしょうか。宜しいでしょうか。

＜前野＞お耳汚しで恐縮ですが…。基本的に、アラビア語と日本語のチャンポンになっていますので、ご了解下さい。少しでも子供たちにアラビア語の良さといえども、アラビア語に触れて頂きたいと言う願いを込めてのことです。では、失礼します。

（前野、歌う）

ハスビー・ラッピー
作詞編訳：アブー・ハキーム

ハスビー・ラッピー・ジャララッラー（ḥasbī rabbī jallu Allāhu）
マー・フィー・カルビ・ガイルッラー（mā fī qalbī ghayru Allāhu）
アラー・ル・ハーディー・サッラッラー（ʿalā al-ḥādi ʾṣallā Allāhu）
ラー・イラーハ・イッラッラー（lā ilāha ʾllā Allāhī）

アッラーがいれば なにもいらない
心の中には アッラーだけ
われらが導師に 祝福を
アッラーのほかに 師をなし

31
アッラーを知れば すべてが変わる
心も身体も 澄みわたる
世界のみんなに 伝えよう
ラー・イラーハ・イッラッラー （lā ilāha ills Allāhī）

ハスピー・ラッピー・ジャッラッラー（ḥasbī rabbī jallu Allāhu）
マー・フィー・カルピー・ガイルッラー（mā fī qalbī ghayru Allāhu）
アラー・ル・ハーディー・サッラッラー （‘alā al-ḥādī ṣallā Allāhu）
ラー・イラーハ・イッラッラー（3 回、復唱）

＜店田＞ありがとうございました。非ムスリムの方にはアラビア語の部分の意味が分かりならないと思いますので、そこを簡単に教えて頂けますでしょうか。

＜前野＞日本語の歌詞の最初がその訳になっております。まずアラビア語のオリジナルが来まして、それから日本語の訳。2番目の日本語の歌詞は、オリジナルの日本語の歌詞なんですから、まず訳が来ております。

＜店田＞はい。YouTube で私が見たとき、子供たちも一緒にやっている状況を見ましたが、実際に子供たちの反応はいかがでしょうか。

＜前野＞割といいと思います。特に今聴いて頂きました、ハスピー・ラッピー、アッラーがいれば何もいらない、というのは、これまで10曲ぐらい日本語のナシードは出来てきましたが、一番子供受けのいい歌です。

＜店田＞子供受けの一番いい。ところで、何か劇というか、お芝居のようなこともやってらっしゃるという。

＜前野＞お芝居につきましては、寸劇という形でやっております。週末学校の機会に、イスラームの先人のお話をよりわかりやすく子供たちに見せたいということで始めたのがきっかけで、それから、日本ムスリム協会の年次キャンプの時にも、ムスリムの集いというコマを頂きまして、披露したりですとか、行徳マスジドが地域のコミュニティの方々と直接ふれあう数少ない機会でもありますラマダン中の公開イフタール・パーティーにおいても、舞台でやらせて頂いております。とくに、台本なんかはターリフ先生が頑張ってくれたりしております。なかなか、イフタールの時に披露させて頂いたもののつきましては、それぞれお子さん、子供から、それからお年を召した先輩方から、そして多国籍な、ムスリムのみんなが一緒になって同じ劇をするということで、ムスリムらし
いところが見せられてきているのではないかな、と思っております。

＜店田＞はい。その週末学校のお話から、先ほど私の方もお話しました次世代のことをについて、前野さんには以前の会議でも次世代のことについていろいろお話していただいているのですが、持続可能ということに絡めて何かコメントを頂けますでしょうか。

＜前野＞むしろ店田先生の方からご許可を頂いて、他のマスジド代表の皆さんにも意見を伺いたいんですけれども、私自身、18歳の時に仏教からイスラームに改宗してから、早くも20年の月日が経ちました。その当初には、こちらに、マーシャーアッラー、ご家族でいらっしゃる名古屋からのアブドゥルワハブ・クレシさんに私の正式な入信式の証人になっていただいて、その後またお世話になったりしました。その後も、このマスジド内に在りながらも、いわゆるイスラームの勉強活動的なものに関与させて頂いてきましたが、その中でずっと、かなり強く感じ続けてきているのが、20年、想像するにおそらく30年、40年ぐらい、プレーヤーが変わっていないんじゃないかと。少なくとも私が来た20年っていうのはプレーヤーがほとんど変わっていないんじゃないかなという印象が強くあります。一人の人が10年から15年、第一線で頑張り続けるというのは有りでしょうけど、20年ぐらい経つと、このままこのままでいいのかな、という将来への不安が頭をもたげてきまして。おそらく各マスジドで、とても地域、接点の活動としても非常に顕著な活動をしておられる大塚マスジドなんか、アキールさんとハールーンさんの二頭体制っていうのはずっと、20年以上頑張っておられると思うんですけれども、理想的なことを言えば、第二のハールーンさん、第二のアキールさんが出てくるのが出てきていよいところでしょう。そういった意味でも、それぞれのマスジドにおいてそのような取り組み、次代を担う人材の確保、アプローチの活動としてはどのような活動をしているでしょうか、というのが私の大きな関心のひとつです。

＜店田＞はい。前野野さんの方からも、他のマスジドの方にということで、ハールーンさんの名前が出たので、ハールーンさんの方から、今の前野さんの問いかけについてお答え頂ければと思いますが。

＜ハールーン＞事実としてですね、第二世代、第三世代、少なくとも大塚マスジドでは、まだそういう人は出て来ていないのが事実です。勿論女性たち、特に日本人の女性たちは非常に頑張ってくれています。実は表には見えませんが、大塚マスジドの9割の活動は女性たちがやっているので、その意味では女性たちのメンバーが圧倒的に増えているのは事実です。しかし男性でリーダーになっている人は、残念ながら、今のところ、これは私たちのこの間の理事会でもこういう話がありましたけど、大きな課題でもあります。

＜店田＞はい。ありがとうございました。それでは、福岡の方から、中村さんかあるい
は古城さん、どちらかお一人、いまの前野さんの問いかけについてコメントを頂ければと思いますけども。

＜古城＞はい。福岡マスジドは正直に言って、設立からまだ 5 年目ということでまだ、創生期というものもあって第二世代、第三世代というのはそんなに頭に入れていませんでした。幸い福岡マスジドの中心メンバーは九州大学の学生さんなので、九州大学の「クムサ」、今日も来られていますけど、Kyushu University Muslim Students Association というのがありまして、留学生たちがやはりどんどん入れ替わります。そういう意味では世代交代というのは他のマスジドよりやりやすいのではないかと思います。そのクムサの顧問の高松先生という先生もすごく理解をして下さっていて、高松先生の企画で、地域の方への働きかけなどもあるので。第二世代、第三世代というのはさっきも言ったとおり、留学生の入れ替えによって、福岡はうまくいくのじゃないかなと思います。第二世代の人たちが頑張っているメンバーについてはもうしばらく頑張らなければならないかなと思います。

＜店田＞はい、ハールーンさん。それでは。

＜ハールーン＞はい。実は、名古屋モスクの代表のクレンさんの息子さんのアミーンさんが後ろにいます。アミーンさんは早稲田の学生さんですね。彼が去年早稲田に入ったときに、私はアミーンさんに、今度ダアワのために頑張って欲しいというお願いをしている所ですね。ぜひ第二世代の人たちが頑張ってですね、頑張らないと。はい。宜しくお願いします。

＜店田＞はい。じゃあまた後でちょっとご発言頂きますが、さきにアブドゥッサマドさん。

＜アブドゥッサマド＞時間の流れがすごく速いので。私は第一回のときに、この会議に参加してたんですけど、今日は 6 回目ですよ。5 年経ちました。最初の時には、この会議の目的は、それぞれのマスジドの代表を集めて、それぞれの問題を報告するとか、どうやって協力するというようなテーマでした。今回この会議が始まってから 2 時間経ちましたけど、どちらかというと、だいたいそれぞれのマスジドの報告ですね。私たちは今、東京、千葉、茨城、群馬など五カ所のモスクを管理していますが、実際の主な問題は、特に教育の問題。それから、モスクの宗教法人の問題。そういう問題がとても大きく、私たちの、だいたい 90 パーセントのエネルギーはここでもう使い切っているのです。

第二世代の話が出てきましたが、Islamic Circle of Japan がそれについて、ずっと考えていて、今ヤング・ムスリムという小さなグループを作りました。多分地方より、東京とか、
千葉とか、茨城の方のほうが、外国人が日本人と結婚して、子供もたくさんいて、教育の問題も出てきているんです。その日本で教育を受けている子供たちが、東京近辺に多いので、そこに第二世代のムスリムの数がおそらく増えていくと思います。それが私等は気にしていて、今 ICOJ の中で男性の、5、6 人ぐらいの若者が、お互いに協力して活動しているんです。結論として、私が今とても困っているのは、この教育の問題です。パキスタン人、または他の国の人たちは、日本で住んでいる人たちもいるし、もっとお金を持っている人たちは、海外に教育させている人も多いです。自分の子供たちが日本で教育を受けられないから、そういうこともこれからも、考えなきゃいけない。本当は日本で教育させるべきなんだけど、もう仕様が無い。多くの人が既に、海外で勉強させている。以上です。

＜店田＞はい。ありがとうございます。後でフロアの方からも、色々ご意見を頂きますが。とりあえず熊本マスジドの方から、オムルザクさんか小嶋さんに、前野さんの問いかけについてコメントを頂けるようでしたら、お願いしたいんですけども。第二世代等についてですね。

＜オムルザク＞日本語で頑張ります。あなたですね、前野さんが言っていることは、多分もうちょっとパーマネントなことだと思います。何故かということと、ここには留学生で来ている人が多い。例えば私たちのモスクでは、福岡モスクでもそうですが、学生のアソシエーションが別になっています。それと、モスクのメンテナンスというようなこと、宗教のことは別々だと思います。私たちはそうです。ですから、学生の協会の代表は、毎年か 2 年で変えているんですね。それで今まではアセプトされているものです。後はモスクのことでしたら、長い時代を経ているモスクは少ないですね。例えば、私は神戸モスクは知っております。1930 年代に建っているので、それはもちろんそういう話をしてもいいと思います。何故かというと歴史があるからですね。どういう風に今までやっていたか、どういうことが問題だったかということはですね。多分そこは、もう自然になっていくと思います。次の代表か、世代が自然に、イスラームのことを自分の責任と思って続けて行くと思いますので。半分以上の日本のモスクはまだまだ若いので、そういう質問というのは多分ちょっと早いかなあと思います。

＜店田＞はい。では前野さん、ちょっとコメントを。

＜前野＞次の問いかけにもつながることですが、確かに仰ることはよく分かります。マスジドによって集まる人が違う。その集まる人は、あるマスジドは留学生、つまり短期滞在者が多い、ということから関心が違うという。おそらく日本全国どのマスジドも似たり寄ったりだと思います。労働者が多いとか留学生が多いなど、違いこそあれ、日本に最初から
永住しようと思っている人はむしろ少ないのではないか、と。しかし、こと私たちが日本でのイスラームを考えるときはもう、それこそ骨を埋めるつもりで、ここで、いかにやっていくかという前提に立ってやっていかないと、何も進まないのではないかと。

私が、行徳マスジドに通う中で、いつも寂しく感じている気持ちの一つというのは行徳マスジドの近くに私が住むようになったから6年、7年経ちますが、幸い礼拝者の数が増えています。ファジュル礼拝の時間にも増えています。マーシャーアッラー、とても嬉しかったんです、礼拝の時に集まって、はいおしまい、それだけなんですね。これでは、言葉は悪いですが、鳥合の衆だった。ムスリム、日本全国増えていると思います。でもそこで、各地域で、元々皆さんご存じの通り、今回のテーマでマスジドの将来像というのがあるのでそこに関連づけさせて頂きますと、マスジドというのは本来的にイスラームの、ムスリムにとっては、本当の意味でのコミュニティセンターで、あらゆる活動、あらゆる行事の中心となるべき存在ではないですか。であるならば、そこにくる人たちというのはそれぞれ本当の兄弟姉妹とし、活動の担い手となって、おたがいに、いわゆる伝教活動だとか教育活動だとかお生まれの活動だけではなく、個人的なつながりとしてのつながりから始まって、家族的なつながりというのも親密になって、そこから本当の意味でのコミュニティ作りというのができて、その輪がどんどん広がっていくものだと、理想としては思うのです。

どうもその先というのは現状では全然見えない、感じられない状態でして、とても大きな寂しさを感じています。皆マスジドに来るけどそれでおしまい、という。その元凶の一つは今言われた、「まだ早いんじゃないの」という感じ。ごめんなさい、批判するわけではありませんが、みんながそれぞれ違った関心を抱いているからみんな別々の方向を向いているのではないか、という風に思います。いかがでしょう。みんなが別々の方向を向いているから結局、同じゴールに向かって足並みを揃えて一緒にやっているという機運にならない。機運が育たないのではないかと。そこで、そういう形に乗っていくにはどうしたらいいんだろう、と私は常々自問するわけですけど、答えが見つからないので教えて頂きたく、ということです。

＜店田＞はい。じゃあ、そろそろオープンにしたいんですけど、ちょっとじゃあ、パネリストの方で手が上がっているので、簡単に、まずじゃあ、ハールーンさんから。

＜ハールーン＞前野さんが仰ったとおりですね。実は私も1991年に留学生として日本に来たときに、まあ最初はホームシックになったり、もう帰る、今年後に帰る、それからじゃあ95年に卒業したら帰る、という、ずっとそういう思いをしていたわけですね。多くの人はそうだと思う。仕事に来ていても、確かにその気持ち。でも、そのうち、気がつくともう10年、20年経っているわけですから、どうでしょうか。やはり経験のある人々ですね、わたしたち、色々なモスク、先ほどアリーさんからも少し話が出たんですけど、その経験ですね、勿論早稲田大学のこのシンポジウムがそうですね、それだけではなくて、ムスリムたちが集まって
てそういうワークショップをやるべきではないかと私も思います。そうすると、その経験する気持ち、最初から皆さんがその気持ちで頑張ればだいぶ違うのではないかと思います。

＜店田＞はい。オムルザクさん。少し短めでお願いします。

＜オムルザク＞はい。前野さんの言っていることは勿論分かります。何故かというと、私もその中だからです。中から知っているから、どういう問題があるというのは少なくとも知っている。前の方でも少し言いましたがこういうところで、こういうミーティングの価値があるのではないかですか。それで私たちも、一方的になくって、両方で、ここで報告するだけじゃなくて、みんなで、じゃあアドバイスを下さい、というような。私の意見ですが、そうすればどうでしょうか。それと前野さんの問いかけのこともどうでしょうか。勿論、現状のままでは寂しいです。寂しく見えると思います。なかなか難しい。イスラームのイメージは良くない。なかなか新しい人は来ない。というのはありますけれど、ちょっと今日よりも以前の状況を顧みて下さい。もしかしたら、それで何か思い出すような価値があるかなと思います。例えば、10年、20年前は今よりも寂しい状況ではありませんか。その当時は、イスラームの代表というのは全然無いと言ってもいい状況ではありませんでした。ですから、そういう状況の中で私たちの仕事をどういう風にやるか、ということですが、今までのことを見ると、それは自然に始まる、始めているということを経験している。自分達のしたいことをしているうちに、それが限界になると、相談をしてみよう、という方向に自然に向かって行くと思います。

＜店田＞はい。まだ議論は勿論、パネリスト同士でも続きますが、総合討論ということでの、フロアの方にオープンにしたいと思います。今最後の方で話している内容でも、それ以外についてでも構いませんので、フロアの方からご発言があれば、お手を挙げて、お名前を仰った上で発言して頂きたいと思いますがいかがでしょうか。はい。ではお願い致します。

＜三木＞大阪国際大学から参りました三木と申します。私は宗教社会学の研究をしておりまして、日本で暮らしている外国人の方々の宗教と日本社会との関係に焦点を合わせてリサーチをしております。ですから、イスラームはもちろん、タイ仏教、昨夜は、ベトナム仏教寺院に行って参りました。それからペルー人だけが集まっている福音主義教会とか、いろいろ日本にはございますが、そういったいわゆる宗教の施設、お寺でありますとか教会とかを見せておりますと、日本社会との接点というのはほぼございません。イスラームもそれでよいのではないかという気がしています。福岡マスジドの方から、地域から孤立を避けたい、というお話だったのではありますけれども、孤立ということややネガティブなニュアンスがあるので、換言すると、平行関係、パラレルな関係でよいのではないかと思いま
す。他のベトナム仏教寺院に日本人が出入りするわけではありませんし、ブラジル人のエヴァンジェリカルチャーチに日本人が行っているとしても、婚姻関係で行かれる方がいるぐらいです。それで別に不都合はない。

イスラームの、マスジドの皆さん方も、日本社会と積極的関係を構築していこうとせずとも、それぞれイスラームの教えに則ったリスペクタブルな生活をしていらっしゃるわけであろうから、もうそれでであれ、あの人たちね、いい人たちねというような感じで、まわりからは見て頂けるのではないか。と。実際、日本の町にも新宗教の教会とか結構ございますけれども、地域社会と関わっているわけではございません。やはり地域社会とパラレルで、それでそれなりの存在感を発揮していればよいのではないでしょうか、という気がしました。これは質問と言うより意見になりますので、リプライ頂かなくてもいいかもしれませんね。ちょっとお時間頂きました。ありがとうございました。

<店田> はい。ありがとうございました。リプライ頂かなくてもいいということなんですが、リプライ…ではまず、古城さんの方から。

<古城> ちょっと優しい方の僕から。後で中村さんがさらに言うと思いますが。福岡マスジドの設立趣旨をちょっと、説明していただけますか。

<中村> 本来的にはやはり、ムスリムのための施設です。ですから今言われたように、孤立も OK だとは思います。ただ、イスラーム自体が、そういう価値観がないものなんですね。全人類のための宗教ということで。自分たちの存在は他者との関係であるんです。ですから自分一人がどうこうではなくて、他人と一緒にになって良い方向に向かおうと考えています。そのために世界的なもので、イスラームという言葉自体が、宗教の教と付けている。もうご存じと思いますけども、特別な、いわゆるハレのものではなくて、ハレもケもないような形でイスラームという。ですから、根本的に、価値観的に、どうも私たちはそういう別個のものという風には考えてないということがあります。

<古城> 福岡マスジドの設立趣旨自体が、その、日本の方々にイスラームのことをもっと知って頂こうという設立趣旨が、そもそもあったので、それがパラレルというわけにはいかんというか、そういうことではない、というのがやはりあります。そもそも論であるので、そういうリプライをさせて頂きます。

<店田> では前野さんお願い致します。

<前野> まず大変おもしろい視点をありがとうございました。ただその上でリプライさせて頂きますと、語弊があったら恐縮ですが、関わりのあるベトナム仏教ですとか、ベ
ルーの教会ですとかいったものは、おそらく、私の想像に過ぎませんけれども、今後も一定レベルの存在感はありませんから、そんなに広がっていかないのではないかとお察しします。イスラームは、ムスリムはですね、今後日本でもおそらく間接的に増え続けると思います。ムスリムではなく、一市民の視点から見た場合でも、これまでのマスジドの広がり方というのは、地域コミュニティとの接点があまりない状況での広がり方でしたから、いってみれば「異空間」。日本の中の「外国」がどんどん広まっていてるのではないかというイメージすら感じるような状況で来たと思います。

しかし今後は間違いなく、日本で育って、出身は、オリジンは様々だろうけれども日本語を母語とする、いわば「日本語人」ムスリムと私は言っていますが、それが確実に増えていくだろうと。私事で恐縮ですが、私でも子が四人、五人産んだ上ですし、アブドゥルワハブさんのところも、マーシャーアッラー、こんなに小さい頃に私が一緒に遊ばせて頂いたアミーンさんが本当にたくましくなって、おじさんは涙がちょちょぎれるぐらい嬉しいですねけれども、お子さんが四人おられますし、ムスリムは子沢山ですので、間違いなく増えていく。

彼ら、次世代、三世代の人たちのキャリアパスを考える上でも、私たちムスリムの方から、熊本マスジドの発表でも情報開示というのがありましたけども、理解を求めていく、また相互理解を構築しているという試み、働きかけてもいかないということには、私たちの子供、および次世代、三世代の子供たちが、この日本社会であらぬ誤解を受けることになってしまいかねないという懸念もあるのではないかなと思います。やはり、全然無関係でいいんじゃないの、ということにはならないかと思います。

＜店田＞はい。パネリストの方から、よろしいですか、はい。この話題を続けるといろいろまだたくさん意見がでそうなので、一旦ここでこの話題についてはやめたいと思います。他には？では、先に後ろの方から、お名前、お願い致します。

＜ムハンマド＞ムハンマド・ヌールッディーンと申します。大阪大学で、日本の近代文学を今、外国人招聘研究員でやっています。去年学位を取っています。今日はここに、実はモスクの代表ではなくて、学生団体の代表として参加させて頂きました。先ほどのパネリストの方々の報告をみたら、主に今日テーマになっているのは、一つ目は教育のこと、二つ目は、次世代のことがあったんです。次世代については私も今日初めてだったのであまり考えてなかったのですが、ひとつ私が考えてきたのは、まず、我々、特に外国人のムスリムの方に問題がある。何故かといいますと、私たちが日本のムスリムたちをあまり中に入れないようにしています。ちょっと批判的で申し訳ございませんが。ですから、できるだけ、日本人のムスリムを仲間に入れて、参加させていこうという考え方です。

二つ目は教育に関する例で、留学生あるいは研究員のような長くここにいる外国人であれば、こういうやり方で何とか出来るかなと思ったんですが、私は大阪府の教育委
員会で3、4年間、ボランティアの通訳をやっています。そういう機会で、大阪府の幾つかの市の小学校から中学校、あるいは高校まで、通訳の件で行く経験がありますので、そういう経験から言いますとやはり教育の問題が大きくなくなっています。大阪府のあるビジネスマンの方が、自分の娘さんを、教育のために、完全な女子学校に送りたい。ところが教育委員会では、大阪府内ではまだ残念ながらそういうシステムはない、という。自分の宗教が第一、という考え方ばかりではないが、結局送れなかった。自分の娘を教育してあげたいけれどもできない。それで、一人の女性の先生を自分の家に招いてお金を出して、そのように教育をさせています。学校内、特に小学校でも、まずは食事のことと、食事の後の礼拝の場所。このような問題は、ここに来ている保護者の方々にいつも生じてきます。給食の問題などはある程度解決出来ますが、一番の問題は水泳の時着替えの件です。男女が皆の前で着替えをするのはちょっと無視は出来ないですね。まあちょっとこの辺はいろいろな問題も出してきてしまいます。だいたい日本のモスクの代表者がここに来て、教育のこと、教育の機会のことをちゃんと考えなければならないのではないかと思っています。すみません。宜しくお願いします。

＜店田＞はい。ありがとうございました。時間も残り少なくなってきたので、まだ発言のある方、発言を先に。どうぞ。

＜アリー＞私は新潟アンヌール・モスクの代表のアリー・チョードリです。まず自分の経験から一言、宗教法人の登録について言いたいと思います。我々新潟モスクも、おかげで宗教法人の登録をしました。まず、目的として、税金をどういう風に払わなくていいかということを考えました。私は仕事を持っていますので、海外から戻ってきたら、留学生の皆さんが4500万円くらいかけて土地を買い、建物を建て、立派なモスクを造ってくれました。それで、2008年にモスクが完成して、2009年に税金の書類が届きました。土地と建物合わせると、約100万ですね。これでは学生たちはやっていられないと。県の方に言って相談しましたら、まず3年間の経験、いわば活動歴が必要だと。それは勿論ありましたので問題ないけれども、学生だけでは代表としては無理だと。それでどうしたらいいか言いますと、私が先頭に立って、どうしてもこういう問題を乗り切りたいので、初めてモスクの代表になって、自分で書類をつくって。そうしますとこんど言ってきたのは、これからいろいろ検査等がありますので、3年はかかると。やはり3年間は税金を払う必要がありました。今度は減額されましたが、年間20万30万は払い続けられない。あまり大げさに言いたくありませんが、本局の方や、県の職員などと色々相談して、動き始めて13ヶ月で、おかげさまで宗教法人として登録できました。2011年からはもう税金も払っておりません。県によって色々決まり事があると思います。二番目に、質問というか相談ですが、モスクは勿論学生主体で動いていますので、4月と10月になってしまうと、新しい学生が入って来ます。そうするとやはり、異文化といったらあれかもしれないけれども、
ど、非ムスリム社会において、ハラールフードの購入などある程度シャリーアを守って生活する上で、やっぱり皆さんにアドバイスしていきたいと。例年だとイスラミックセントルあるいは日本人のムスリムの方を呼んで色々発表して頂くのですが、ハラールの決まりというのは非常に、厳しく言えば厳しいですね。きりがありません。パン一つ買っても、地域ごとに工場も違いますし、同じリストを作る作成しても地域によって違いがあります。

そこでハールーンさんに伺いたいんですけれども、どこまでそういうリストがありますか。私の経験から言うと、誰も責任を取りたくないんですよ。私がここを代表であると言って、もし何かあったら、責任が私に来るのです。誰も責任を取りたくないんですよ。もしリストがあれば、日本全国、山崎パンだとこれは大丈夫だ、というようにですね。リストあるいは、ショートニングやソルビットなどについて。例えば日本の 9 割のショートニングはマレーシア製で植物性といいますけれども。こうしたものについて何かアドバイスを頂ければと思います。

＜店田＞クレシさんちょっと待って頂けますか。もう時間がほぼないので先に、先ほどからお名前の出ていた名古屋のクレシさんから、せっかくですからご発言頂ければと思いますが、宜しいでしょうか。次世代についてでも、他についてでも構いません。

＜クレシ＞先ほど前野さんから、プレイヤーが変わっていないことに関して伺っていたんですが、僕としては、1988年から名古屋イスラム協会を作って、その後ずっと活動をしてきて、1998年に名古屋モスクを作りました。その後に色々変わりがあって、僕としては、できたから本当に学校を作りたかったんです。教育の問題は、あの時点からまだ絶対大きくなってくるはずだから、どこに声をかけてもやはり、親の方からやろうという言葉は出るんだけど、やるとなったら、1 回目のミーティングがあって、2 回目で逃げる。3 回目は誰も来なくなる。こういうことが、その間ずっと続いているんですよね。やっぱり私たちの奥さんが、子供に学校を作ると言いました。その後、7、8年はがんばってやっていったんですが、その後にムスリムの子供が入ってくると思っていたらなかなか入ってこない。では何故入ってこないのか。クレシさんがやっているからとか、何か訳の分からない言葉を言いながら、何か逃げるんです。自分が個人的に逃げた人達の所へ行き、では何でそれ自分たちでやりましょう、ということを言っても、聞くと、結局、自分の子供は先ほど話が出たようにお金があるから、ドバイやパキスタンとか UK に、どこでも送るお金があるからと、それでももう話を終わらせてしまう。

では、日本では誰が支えるのか、第二世代と、僕たちは言うんだけども、どこが出てくるの。私たちがやられなかったら、誰がやるの。そういうながらも、本当に何回も声をかけても、どこからももう、シーンと、声が出ないんですよね。これは難しい。できない。じゃあ、できないことから、じゃあそうしたら、前野さんのさっきの話を戻るんだけど、まあその、プレイヤーが変わってないことに聞いてですが、僕も自分自身が降りたいんで
すよ。続けてやってくわけじゃないんです。誰がでていくからやって欲しいの、それは。自分の団体の中に日本人が 3 人いるんですよね、今は、僕だけじゃない、3 人日本人がいるんですよ。だから、本当に出てくる人がいたら僕は是非それをやっていただきたい。

あとは、大事な話を今からしますが、ハラールに関してですね。色々話が出ているんです、僕が思うのは、このハラールに関して問い合せがきたら、できたら質問するところをまとめて欲しいんです。どんな団体も、色々な団体が、自分の好き勝手なことを一杯言っている。結果、問題をすごく難しくさせています。ですからこのハラールのことは、せっかく今ここに集まっているので、東京、名古屋、九州、どこでも良いので、まとめてそこに話を持って行きましょうという方が良いと思います。

あとは隣人の方の話。このミーティングでも既に出ましたのが、周りの人たちと仲良くすることも勿論しなければいけない。日本人ですと、例えばラマダーンの断食の時に、必ずご飯を持って近所を回って、皆の家に渡すんですよ。こうこうから、今日はどこの国のご飯ですか、って言われるときに、本当にすごく嬉しいんです、それはね。ですから、そういう時に皆さんに連絡を取ることというのは、皆さんが頑張って自分の所、地域で絶対やっていると思いますが、どこかでそれをまとめて何かをしなければ、ここまで話してきたような、寂しい言葉ですね、皆モスクへ来てお祈りしたらそれで終わり。本当にその通りなんですね、ではや人が出てくるかというと、だれもやらない。

僕は 5 年前から、名古屋だけで、東海の会議を作りました。今、6 モスク。皆の代表を集めて、代表を集めませんと。こういうところが声をかけても返事が返ってこない。やってがいないから。皆が頭の中、自分が苦しんだ後のことを考えていって、そこで行けば自分の居場所を作るだろうという気持ちで皆モスクをつくります。モスクでも良いけれども、これからのことを、本当にやっていけるのか。この問題が置き去りになったときに、どうすればそれをできるのか。考えているところを皆さんに本当に心からお願いしたいんですが、出来たら一つの所にまとめるようにして欲しいのです。どこでも良いので、リーダーをして貰いたい。色々な教育やハラール、近隣の問題がそれは出てくると思いますが、何かとそれが出来たら宜しくお願いします。

＜店田＞はい。ありがとうございました。いろいろと大きな課題をお話しされたんですが、ハラールについて先ほど新潟からもご質問があったので、ハラールについてのみちょっと。

＜ハールーン＞はい。今、証明書を出しているハラール機関のムスリム団体が幾つかありますけど、先の質問に対して、海老名モスクでオンライン・コンサルが出来ております。彼らは日本全国の皆を仲間に入れるのですから、月 1 回集まって会議をやっています。彼らの一つの活動はハラールのリストです。印刷はない方がですが、インターネットでは、
これがハラール、これがハラームというリストがあります。ハラール・ジャパンということで検索すれば出てきます。何故印刷しないかというと、名古屋モスクが頑張って、何年か前に印刷したのです。そのリストはまだ、いろいろなモスクにあるんですね。それで、新しく留学生が来たときにそのリストを見て、間違い可能性もあるから今は印刷しない方がいいということです。インターネットでは、そのリストがあります。

＜店田＞はい。それでは古城さん。

＜古城＞福岡マスジドのDVDでごらん頂いた活動の中に、ムスリム・フレンドリー・セミナーをやっていると出ていたと思いますが、あれの主な内容として、各企業さん、メーカーさん、あるいはお店、飲食店に対して、成分表示とか料理方法を、しっかりと、外国人の方にわかりやすく表示して下さいということを言っているんです。その上で、これがハラールですよ、というのではなくて、利用するほうが、ハラールかどうかというのをジャッジすることが出来るようにして下さいということ。こちらが、これがハラールですよと言うわけじゃなくて、もう使う側がジャッジできるようにする材料を揃えて下さい、そのためにご協力下さいという活動を行っています。

＜店田＞はい。マグリブの時間も迫っていますが、前野さんに最後に。<br />

＜前野＞ムスリムの皆さんがきっとハッピーになってくれるコメントとですね、提言を一つ申し上げたいと思いますけども、先ほどのクレシさんの発言をサポートするようなものですが、実情としては皆本当に色々、関心が払うからで、生活のこと、国に帰った後の話、色々あるんですけれども、イスラーム、ムスリムにとっては、間違いない話として、こんな伝承がございます。イザー・マータ・アルイクンサーン、インカタア・アンフ・アマルフ・イッラー・サラーサティン、イッラー・ミン・サダカティ・ジャーリヤ、アウルミ・ヤンタフィウ・ビヒ、アウサーリヒン・ヤドゥウー・ラフ。頑預者ムハンマド様が言われた言葉として伝わっているものです、アライヒッサラーム、サラートッサラーム。「人が死んでもした、その人の行いは、三千のものを除いては全て途絶えてしまいます。永遠に続く施し。あるいは、役立てられる知識。役立つ知識。あるいは、故人のために、亡くなった人のために、祈ってくれる子供たち、子孫です」ということで、間違いの無い課題として、皆で共有すべきものだと思います。

提言としましては、これまで、早稲田大学アジア・ムスリム研究所の皆さんをお邪立てをして下さって、このような会を運営して、開催してきて下さったことに心から御礼申し上げますとともに、このあたりで、今後続けないで下さいというのではないです、これはこれで引き続き続けて頂かたいと思いますし、私たちも皆さん双方、研究に資することが少しでもあれば幸いだと思っておりますので、双方に役立つような関係を築いてい
けたらと願っておりますけども、こちらで私たちは、早稲田イニシアティブではなくて、ムスリム・イニシアティブのですね、そういう会議をすべきじゃないでしょうかというのが提言です。先ほどクレシさんの話にありましたけども、そういうことを提案しても来してくれない、ということもありましたから、ここで皆さんの言質を頂いて、私の身内の人、ムスタファ角岡さんという日本人ムスリムの人がいるんですけれども、彼の発案で、日本語人ムスリム・イニシアティブで、日本語でやる、日本に生きるムスリムの会議をしようじゃないか、したいという発案がありますので、それが実現成るときはインシャーアッラー、是非皆さんのご参加を宜しくお願い致します。

＜店田＞ありがとうございました。パネルディスカッションの予定の時間も過ぎました。また、マグリブのお祈りの時間も迫っていますので、このあたりでお開きとしたいと思うんですが、パネリストの方から、どうしても一言しゃべっておかないと駄目だという方はいますか。宜しいでしょうか。会場の方も、是非、とか言う方は、宜しいですね。はい、最後に、前野さんが、そういう案が来たら必ず参加しろるとありましたのが、インシャーアッラーと言ってたので、インシャーアッラーなんですが、はい。アミーン君、最後に次世代の代表として何か言ってくれますか。

＜アミーン＞早稲田大学 1 年のクレシ・アミーンと申します。ちょっと、未熟者であまり言えることはないのですけど、次世代のムスリムという話題に触れさせて頂きますと、日本で生まれ育って、完全に、僕の中では日本人の価値観で育ってきて、且つ名古屋モスクの代表者の息子でもあり、という環境で育ってきました。現状として、小学校・中学校・高校と日本の学校に通ったんですけど、やっぱり、ムスリムに対しての偏見というもののかで、周りに一人もムスリムがいないで、学校の中で自分一人っていうので、やはりとても息苦しさの中で生きてきて、すごく生きづらかったな、っていうのが結構本音であります。第二世代ということなんですが、今こうやってパキスタンや色々な国々から色々な方々となって頂いて、一番難しい段階だったと思うんですけど、色々なルートを植えていただいたので、日本で育って日本の価値観を知っていて、かつイスラームの価値観も知っている、自分で言うのも何ですが、僕のような人たちでこれから、両方の価値観を持った私たちで、「共生」、日本とイスラームがうまく共生していけるような国だったり、団体を作っていきたいな、とは思っています。すいません。ありがとうございました。

＜店田＞ありがとうございました(拍手)。お年寄りのムスリムの方々がみんな期待していますから、宜しくお願い致します。パネルディスカッションのセッション、私のところはこれで終わりに致します。どうもありがとうございました。最後に、小島先生の方から最後のご挨拶がございます。
＜小島＞あまり時間が無いのでたいしたことは話しませんが、今日は、足下も悪い中、
また交通機関の乱れの中、一部の方は遠方からわざわざお越し頂きまして、ありがとうございます。
それから前野さんがこの会は、アジア・ムスリム研究所が主宰したと仰いましたが、3回までは店田先生のところの、多民族多世代社会研究所のほうで主宰されたものです。それから、最後にちょっと宣伝めいたものを言いますと、日本の場合はムスリムの人口が少ないということもありますが、ヨーロッパの場合は、国によっては5パーセントから10パーセントいるところが多く、国内でハラールの市場も成立して国家が認証に乗り出してくれるようにもなっているところもあります。今度、3月4日、この早稲田の、この同じ建物で、西欧の話もありますし、それから、3月6日には京都の同志社の方でありますので、ご興味のある方はそちらにいらして下さい。では、これで終わらせて頂きます。本日はどうも、皆さんありがとうございました。 (完)